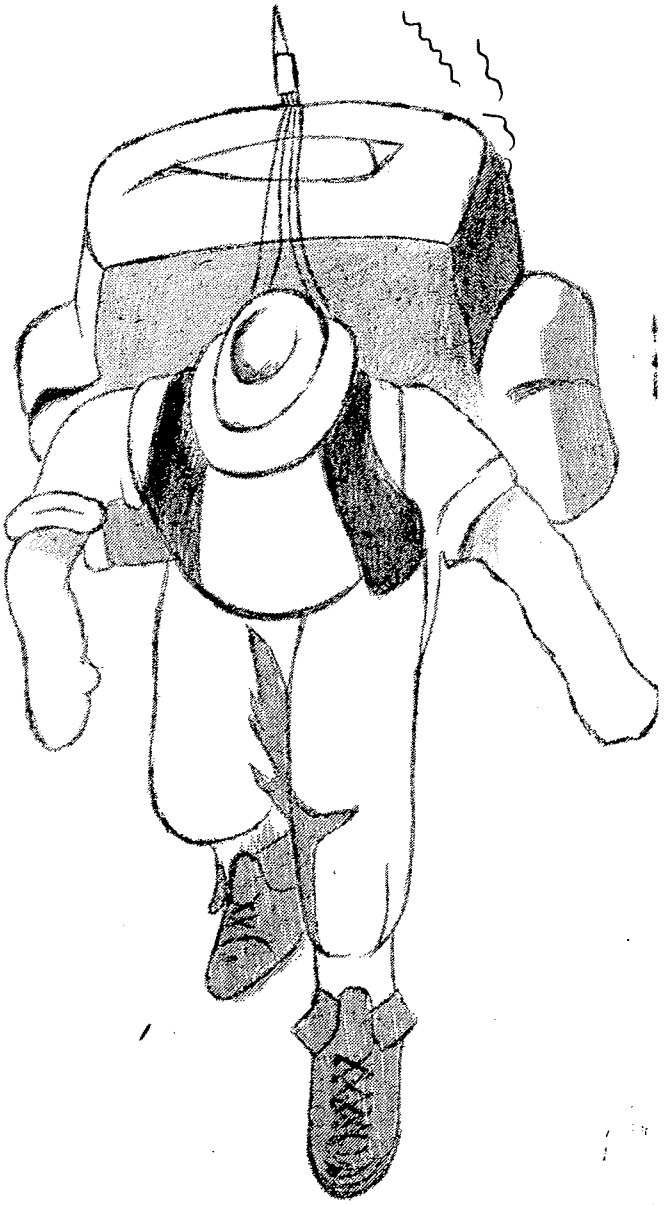
16



彷徨

巻頭言

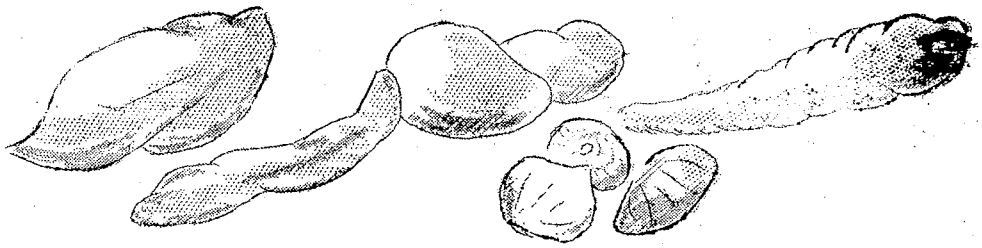
野原　光

西高山岳部創立以来十五年余、我部は初期におけるスポーツアルピニズムとハイキング両派の抗争でのアルパイン派の勝利ののち、スポーツ登山を旗印としてまっしぐらに進んできた。強力な組織と高い水準を誇り、西高は、西高独自の道を歩んできた。

ところが十五年たった今日、我西高山岳部は学校の圧力（あえて圧力と云わせてもらおう）のもとに再び零の状態にもどろうとしている。学校側のいいぶんもうなづける点が多いが、事故による責任を恐れるあまり、僕等の山にあこがれる気持がどれだけ大きいかを理解しようとしない。生徒の自治活動に対する意欲を出来るだけ伸ばそうとする真の教育者の心を学校に求めることが僕達として身勝手な要求であろうとは思えないのだが。

最近一・二年西高山岳部のレベルは急激に低下しつつあるし、その伝統的精神も忘れられつつある。けれどそれでも我々現役のうちにはわずかながらもその精神は残っている。それがここで学校から正面きってスポーツ登山を否定されたら、今後の新しい部員には伝統的な山岳部精神を伝えることもできないし、組織的な訓練や強固なチームワークその他安全に登山を実施するための基本的な要素すら期待できなくなる。

従って、僕達はまず部の組織を守る為に努力し、部の実質的解体といった最悪の事態になった時も、何らかの形で、僕達の体得した山岳部精神を後に伝えるよう努力しよう、その為にはもっともっと現役が山に対する情熱を内にたぎらせ、つちかわなければならない。山登りの魅力のとりことなり、万難を排して山に登ろうとし、他の部員をぐいぐいと引っぱってゆくような激しい気力をもった中堅部員のでることを期待する。



目次

巻頭言

山岳部現状の報告……一

山行レポート　一九五九年度……二

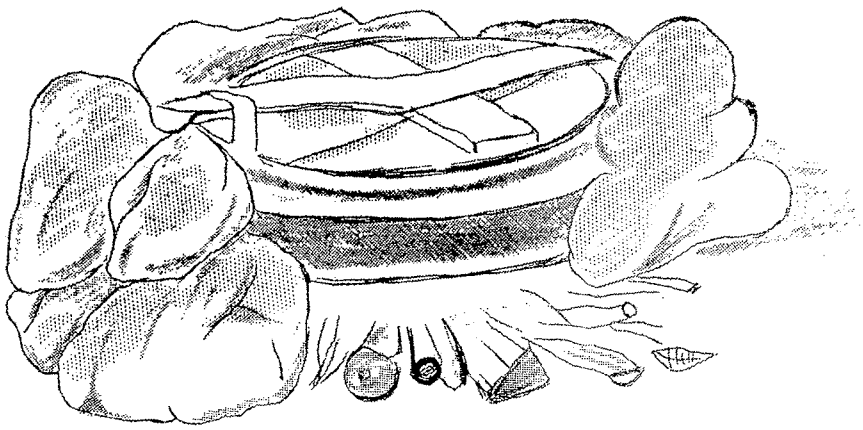
個人山行……九

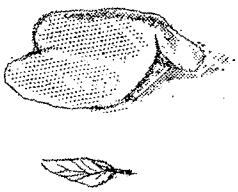
夏山合宿（一九五九年度）……一三

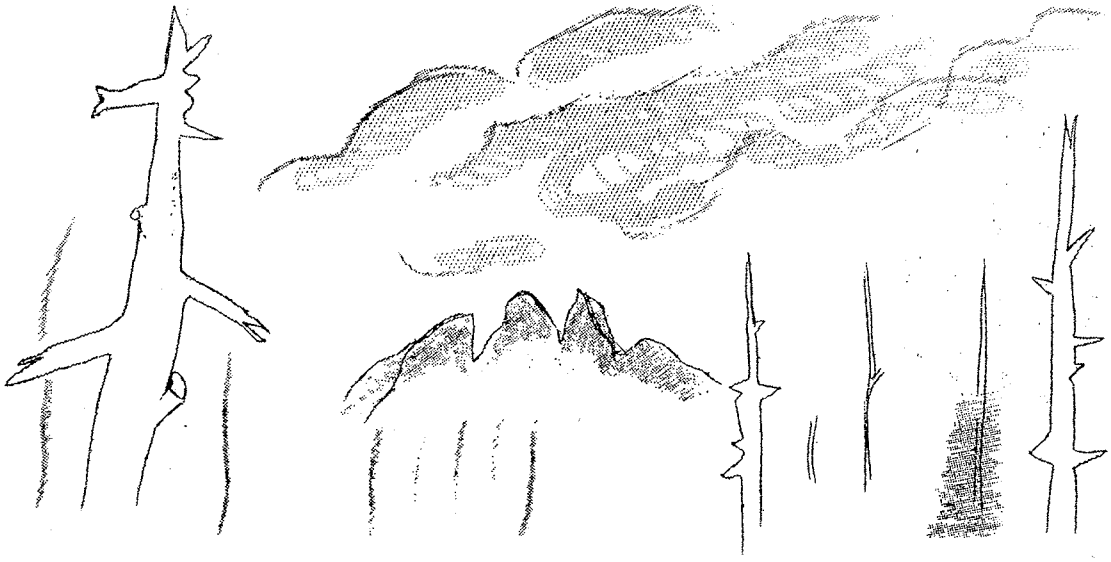
春山合宿（一九五八年度）……一九

春山偵察山行（一九六〇年度）……二一

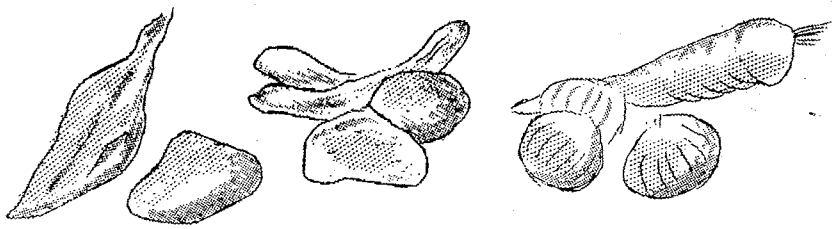
山行総覧……二四







春山合宿（一九五六～七年度）……三〇
ひとり一言……三六
懇談会記録……四〇
西朋登高会の近況……四一
今後の西高山岳部……四一
常備器具表……四三
部　則……四四
部員及びO・B名簿……四九
編集後記……五一
ゴシップ……二七



山岳部の現状報告

板垣乙未生

現状の報告の前に、昨年までの山岳部衰退の経過を述べる。

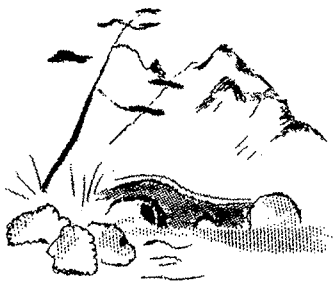
昭和三十一年度の夏山において一人の山岳部員の死が生じた。その死によって学校は打撃をうけ、当山岳部に対して相当の制限を入れた。都教育庁の山岳部に対しての通達を厳守する（もちろん顧問に関してだけしことによりこの制限がなされた。この制限とはいずれも顧問能力の弱小に起因している。冬山、春山を指導する力がないとして十一月から三月まで公式山行を認めず、学校はその件に関知していない態度をとった。（我々としては非公式山行として十一月から三月まで行った）又夏山の日数は制限され、縦走は敬遠されたところが昨年、非公式山行も事実上禁止され（山岳部に入っているゆえに冬山、春山に登れなくなる）当山岳部の冬季登山の望みは絶えはてた。これだけ制限を加えてもまだ顧問は山岳部について行けなかった。

○昨年度は山岳部の生死のさかい目だった。夏山は顧問の関係で制限され、校長は山岳部を漸次解消の方向へ持ってゆくことを述べた。そして新年度を迎えるに当って、顧問のなり手がなくなってしまった。（いままでの顧問が当山岳部流のやり方について行けないとしりごみした。）学校はこれを機会に山岳部を休部（事実上廃部）もしくはWV同好会にしようとした様子であったが、我々が顧問の力量を考慮して山行を行うこと契して、二人の先生に顧問となってもらった。

○現　状

顧問の発言权が強くなり、山行はすべて顧問の問題にしぼられてきた。夏山は顧問にお願いして五日の横尾定着合宿。夏山一つやるのに大変な説得力が必要である。顧問の体の調子が悪ければ山行は中止となる。四月から十月まで六回の公式山行ができたが、満足な山に登れない現状だ。このような状態で山岳部としての存在価値があるのか疑わざるを得ない。今年も十一月以降の山行は禁止。山岳部の前途は暗い。我々がいくらもがいても仕様がない事態にきている。

×当山岳部の末期的症状は他校に比べて早く現われたものにすぎない。（教育庁通達を無視している学校は別だ）我々は学校にいくら叫んでも通じないことがわかった。この問題解決には教育庁や日本山岳会及び連盟が動かねばならない時がきたのではなかろうか。いや、とっくに来ているのだ。



1959年度

山行レポート

川苔山

新人歓迎会

△先発隊　加藤清気　吉田　小杉山、田辺
△後発隊　高橋（通）、高橋（輝）、野原、和田、弓削、吉田、板垣、小山、松浦、川崎、三和、梶内、川田泰、小川、高橋（範）、高山、OB・田中（康）　沢野、顧問・小林、中沢（義）先生

目　的

新人と先輩のあいさつ会。楽しく過ごすことが目的。そのため先発隊が前の晩造林小屋に泊って、飯の用意がされる。この記録は主に先発隊について書く。

四月十八日（土）

川苔山登山口でバスを降りる。川ぞいの広い道をさかのぼり、すぐに森林帯に入る。うすぐらい。背中がしっとり汗ばむ。遠くに鳥の声、すぐわきで川の激流の音。息づかいがそろそろくるしくなる。「ちょっと止ってくれ」「それ、ありがたや休けいか。「紙をはらなくちゃ」「例の案内の紙をはる間、五分ほど、立ったままで休む。途中五、六ヶ所でこいつをはったおかげで、二十分に一回ほどの風を入れることができた。みはらしもきかず歩くだけ。紙も残り二、三枚になる頃、あたりの空気も、ひんやりとなる頃、そう五時頃だろうか、大滝につく。ここまで登山口より一時間半ほど。空はまだ明るく、記念撮影をする。ここで二十分ほど休んで、大滝をまいて、あとはもうすぐに造林小屋。最後に残った一枚の紙をおしるこのにおいがしませんか？」

その夜田辺さんが到着してから、色々と話しこむ。人生論あり恋愛論あり。そらしやとおどしやと。かくして夜も十二時を過ぎる頃四人は小屋から出て、ばん声をはりあげる。木の影が一本一本くっきりと、いやにはっきり目に映る。折しも十五夜が中天にかかり、聞えるものとて、川の音と風の音のみ。

四月十九日（日）

六時帰床、朝飯後すぐに昼飯の仕度にかかる

コッフエルにこぼれんばかりにふくらんだ小豆。飯をたいてカレー汁を作って、おしるこもできた。

十二時前に用意万端ととのい、待つ程に、高橋(輝)を先頭に一行の到着。それから、楽しく食事。あとは川苔山へ行くだけだ。

大菩薩峠

五月　十六日〜十七日

参加者　CL川田・梶内・泰・鈴木・小杉山・吉田・野原・高橋(輝)・加藤・三和・和田・石削・山本・川崎・小津・板垣・小山・松浦・兼松・　顧問　小林・中沢(義)先生

汽車が塩山の駅に停車せぬうち、あちらこちらの窓から飛び降りて、バス乗り場へ一目散に走って行く人が多いが、僕達は苦もなく乗り込めた。懐電を腰に真暗な夜道を列をなして歩き出した。程なく空が白んで来て登口へ足を入れた時はすっかり朝だった。早朝の朝の冷気を思いきり吸い込むと身が清まる感じがした。朝食を軽く済ませた後、足並そろえて登って行った。この山は変った形をしていて　大菩薩嶺直下の十五分の登りだけがちょっと急で、そこ迄は広く開けているのだ。この頃はすっかり五月晴となり、若葉青葉に覆われた山は目にも鮮やかに水々しく。この時期の山は秋の紅葉に匹敵する景観である。片や拓れ行く者の邪邪的美であり、片や生命力にあふれる発剌たる美である。木々の向より遠くはるかに輝く白峰は南アルプスの山山急なつめを登って振り返ると真近かに大きく富士の山を見て、その美しさに手は思わずシャッターを切る衝動をかり立てるのか、その音が各人の手から発した。古今東西富士山程貴族的な姿を持った山はないだろう。昼食をとり大菩薩嶺を往復し峠へと向った。この道は既にハイカーの列で遠く迄続いていた。峠の記念碑下で小休止、そこより下りにつき、フルコンバ小屋に到る。フルコンバ小屋で、にわかに武骨者の手によってお茶の会が設けられた。山岳部伝来の金の茶椀で飲みながら歌声高らかにとは言えなかったが、色々と歌い話合した。笹の中に身を沈めて寝そべり、ここで一時間以上ゆっくりと休んだ。日が西の方に回りかけると下りについた。下りはだらだらと続き、昨夜の車中でつまらぬ話をして眠らなかったのがたたり、目は開いていられなくなるし、あくびは連発するしで意外に長かった。途中の小休止で簡単に地図の読み方について指導し、現在地を当てさせた。丹波を前にして川で顔や手を洗い、人里に出る仕度をしてから後、バスに乗るエチケットを忘れなかった。混んだバスの窓外に奥多摩湖を望みつつ、一日の疲れを休めるべき家庭へと急いだ。

滝上谷後発隊

テント場発(7.05)——出合(8.55——9.10)——チョック(11.25——12.20)——尾根(2.00)——はなぞ岩(2.20)

朝霧の中を小川谷林道をたどる。カロー川分岐点でワラジにはきかえ、二隊に分れる。前発隊の無事を祈る。分岐から滝上出合まで

大分時間をくい、ここで軽い昼食をとる。
太小屋の滝に至る。前日の雨の為浮石が多く進行が渋る。
中段林道を通過し、谷は廊下状になる。チョックストーンの所で一時間ほどもたつく。（アンチョコの右巻きは間違いし参考書のたよりなさを再確認。水量はますます減り二・三の涸滝を越える。最後のつめに入る。ここで水を補給する。道を誤り十五米の滝に出会わず、どんどんササの中をつめる。結局県界尾根の大乗頭よりに出てしまう。この尾根をワラジのまハナド岩にたどる。三時岩につく。ここで軽い昼食をとる。

滝上（大麦谷溯行）

六月公式山行
期日　六月廿日―廿一日
大麦谷隊　L川田、吉田、加藤　小山、松浦
兼松
滝上谷P1　L高山　高橋（篤）、高橋（通）
小津、和田、三和、中沢ナミ子先
生
滝上谷P2　L田辺、小川、野原、弓削、長谷
川、山本、板垣、

大麦隊コースタイム
起床（4.00）　出発（5.00）加老出合（5.10）沢に入る（5.30）―（5.50）滝上出合（6.40―6.50）、大麦出合（8.30―9.00）大滝（10.20―11.00）チョック（12.20）―（1.10）尾根（2.00）花戸岩（2.20）二年下山（3.10）

我々が午後の雨上りの山道を歩き出したのは、四時半頃、相変らず稲村岩が、その厳しさ以上に優しさをたたえて迎えてくれた。谷底で騒いでいる川の流れは六月だと云うのに豊富ではない。テント地に着いた頃空模様が怪しくなって来、懸命にテント張りを急ぐ、しかし練習不足の為か、一年は動きが遅く、夕食が七時半頃になってしまった。あとからいらっしゃった中沢ナミ子先生を交え、フアイアストームを囲んでの楽しい夕餉。一年は最初の幕巻か、おとなしい。就寝は十時だった。
翌六月廿一日、起床四時、晴天から、一年生はグッスリ寝たらしい。まもなく河原で弁当を食い始める。新人の多少とも不安の入りまじった顔は見のがせず、「心配すんな」と云いたい様な気がした。すぐ様、距離のある大麦班は出発、一時間程遅れて滝上班は出発した。（幕巻荷物を小屋に預ける為である）
さて我々大麦班はバリバリ飛ばし、道が切れ沢に落込むがし場から沢に入った。沢登りで最初の失敗はあとまで不安を抱かせると思い、ゆっくり進む。両側は絶壁、かぐわしい若葉の香りに包まれるあの沢底で、我々は無念無想になって岩に足を進めた。一年も調子が出て来た様だ。あの気味の悪い程までに青く静かにかまえているお釜、頭の中を洗い流すように清くザアーザアーと流れる爽やかな滑滝、そんな時、そんな所ではまぶしいばかりの若葉にかすみがかゝり、やさしく我々をつつんでくれた。又鳥の声まで聞え、まさにこの世の天国ってところだ。「来た!!」とうとう来た。あの大滝に、霞の中に　とうとうときびしく落ち込むあの滝を見た時、俺達はモコモコともりあがってくる闘志を感じた。一方では不安をも。昨年ザイルで引上げられた僕にとって、一そうひきつけるこの滝だった。滝水を浴びビショビショになりながらも新人はザイルで引上げ、全員無事に直登したのは十一時である。
この滝は左下から取付き、途中までは難な

く行く。中段からはチムニーの中に体を入れちょっとした柔軟体操をすれば落口の下の段に着く。あとは強引によじ登ってしまってかまわないだろう。水量が多い時はズブヌレになる事は覚悟しなくてはならない。ここ登り切った所は瀧壺で、右側に取付き、慎重に巻き始めた。タツマの滝がパリッと突っ立って眺めは最高だ。岩のモロイ巻道が相当高く続き、ついで左側からタツマの落口に下りる。樹木にはツタが巻きついて、いよいよ奥に入ったなと云う感を強め、胸がワクワクする。約平20mのかなり大きな滝に出くわすが、右のヤブを巻けば、そう難しい場もなく、チョックストン滝につく。滝口はオーバーハングで絶対登らない方が良く、左側から巻いた。静かになった流れで、いよいよ昼飯だ。よく冷えたキウリと、流れの奏でる軽音楽とが食欲を進めてくれる。一時十分、さあ出発だ。ブ厚い雲の中から太陽も顔を出し、少し疲れの出た我々を励ます。四十分後、右からの沢でワラジハキカエだ。水も切れかゝり、パチン、パチンとしずくする音が一つ一つ我々の緊張を解きほぐしてくれる様だ。10分程ヤブをこぐとポックリ林道に出る。懐しい土の香がたゞよい、まるでジュータンの様に我々の踏み出す足にフツクラと応えてくれる。カラ松の枯枝をパチパチと踏みつけてトバシ始め二時二十分ハナド岩に着く。靴ヒモをゆわえながら谷から吹きつける風の爽やかさを味わった。

小常木谷
火打石谷遡行

九月公式山行　六日

小常木隊　L加藤、高橋（通）、高橋（輝）、松浦、三和、板垣、小山

火打石隊　L野原、吉田、弓削、山本、川崎、和田、小林先生

小常木隊コースタイム

起床（4.00）出発（5.00）滑滝谷出合（5.20－5.40）余慶橋へ戻る（6.50）火打石出合（7.40）小常木大滝（10.05）ねじれの滝（10.40）昼食（11.20－12.00）二股（1.55）北東の沢へ入る（3.05）岩岳尾根（4.20）前飛竜（4.40－5.05）サオラ峠（5.40）丹波（6.15）

（五）

初めから奇なることをして、小常木・火打石出合についたら火打石隊の方が早くついていた。これは滑滝谷出合を小常木出合と間違えて徒渉したからである。ここから、右岸から入っている花の木沢迄の一時間余は、花の木沢手前の下5.6・6.5・7.3mがあるだけで、難なく過ぎる。ここらあたりから美しいシマ模様の廊下となる。すぐに垂直に近い下8mの滝が現出するが、左壁にとりつけば岩も固く快適な滝である。滝口直下の左手のクラックが登りにくく、ザイルを使って引張りあげる。さて、やっかいな置草履の悪場が始まり急崖が続々現れる。下.8mのすぐあとに下.10mがあるが、直登不可能なので右手を高捲く。岩が不安定なので要注意。続くナメ滝を右からこすと、沢は二手に分かれるが、右手は30m40mのXX滝がおゝいかぶさるように威圧する。我々は左手の沢にむかい、18mの不動滝を右岸より高捲き、ザイルで下降し落口に立つ。しばらく行くと小常木の大滝18mが現われる。これも残念ながら見送って、右手を木の根に頼りながら高捲く。ここで置草履の悪場が終り、一息ついて、先程からブーブー言っていた連中が静かになる。8mの噴水滝

の他は知らないうちに通りこして、岩床が赤味がかかって小滝が続き、さてここでアンチヨコにある桧沢、ナメラ沢が出る所だが、見過ごしてしまってトンと分らない。あとでこれが問題となる。つまり右岸にナメラ沢が入ってから、沢が二股になる地点が現れる筈であったが、突如、二股が出現（水量、広さとも、どちらが本谷かわからないしてギョッとする。昨日、山荘の主人から岩岳尾根に早くつきすぎると迷う。とおどかされているので慎重に慎重を重ねる。左の沢はすぐ棚のようになっている。右の沢は北東に走り陰気臭い。偵察を出したりして、モタモタすること二時間にして右に入る。小沢が現われるがこれは左にとれば、前飛竜から三番目のピークに出る。歓喜の奇声を発すると、遠くでどこやらか美声が聞える。「火打石の連中もモタついているらしい。こりやおくれた弁解をするのに都合がいいぞ」と二年はニタリ。気合をかけてやったのはいいが、案に相違して前飛竜に来たのはリーダーだけ。すべてを悟った時は遅かった。リーダーと先生だけ残って、他は帰ってしまった。六時のバスにおいつけとばかり、山頂からサオラ峠まで三十五分、峠から丹波迄三十五分というフルスピードで下りたが、七・八分遅いで、バスの最終便は丹波をおさらばした。この失敗の原因はアンチヨコを頼ったことと、まわりの状況をよくみなかった為にある。我々のとったコースは間違わなかったが、沢における現在地点の確認に不注意だったのは、今後よく気をつけねばいけない。

丹沢コースタイム

丹沢山塊

10月17日
新宿発　2：35
渋沢着　3：45
水無川河原　4：55
出発　6：35
一本松　7：55
塔の岳　10：39
就寝　12：45
10月18日
起床　5：00
出発　8：30
水無川河原　10：20
出発　11：50
渋沢着　12：45
発　1：06
新宿　2：20

十月十七日〜十八日

メンバー　L野原、小杉山、三和、弓削、山本、川崎、小津、福田、板垣、小山、松浦、松田

台風が近づきつつあることを理由に、学校から中止するようにとのこと。がたいした天候でもないし、天気の状態はその場の判断にまかせることとし、新宿を出発する。もちろん「いわゆる」純然たる個人山行という名の下に、一年は九人、二年は三人、大分無謀のような気もするが、記念祭の時に春山の偵察に、二年四人がでかけているので、その関係上やむをえず強行。けだし丹沢山塊は標高差もなく、ひらけた山なので、別に危険があるとは思わない。土曜日、例により例のごとく「バカ尾根」にとりつく。雨がふったため、道がしっとりとぬれている。道中がせまくなり、一人二人ピッチがおくれだす。二度三度すべり、ついに足をつる者が出現、結局パーテーを二分し、おれが弓削につき、野原はひと先づ先へ。その晩十一時までかかって悪戦苦斗の末「塔ヶ嶽着。雨まじり、風は強い。寒い。翌朝、雨で山はかすみ、寒い。あきらかに台風の影響と思われる。秋の雨はこわいし、又こんな天候の中をショボショボ歩いたところで、寒いだけで何ら得る所無い故に、このまま引き帰すことに決定。赤土がすべって具合が悪い。帰りは福田のお供。遠く東京湾が見える。わりと景色はよい。「さあがんばれ！もう少しだ！」大倉の登り口で　愚

重下降の練習。雨がつめたい。どうやら無事に終った。

奥谷、福田両先輩の遭難の直ぐ後の、十月三十日におこなわれた、例の山岳部員の父兄と先生の懇談会で、校長先生が「十月の山行は学校で禁止したのに行った。学校の言うことがきけない奴は、学校におくことはできないし」と言ったとか。がどうやら円くおさまった。これがあるいは最後の山行にならぬとも限らぬ、一まくだった。（小杉山）

スキー合宿

十二月もおしつまってから二年生にとっても一年生にとっても全く新しい経験であるスキー合宿が実施された。十月の山岳部父兄会に於いて、今後の部活動に関して山岳部にとっては誠に手痛い学校側の態度が表明され、その後は慎重策をとり十一月山行を見合せ、更に例年の冬山山行形態では十二月も実行可能とは言い難くなった為、活路を求める策として O.B のスキー合宿に参加という形で学校側の許可を得たのである。

スキー場は長野県と群馬県とのほぼ県境の上信越高原国立公園内山田牧場。宿は山田牧場の下の七味温泉。期間は十二月二十五日から三十日迄。

参加者　CL 野原、SL 加藤、小杉山、高橋（輝）、吉田、三和、弓削、和田、坂巨、小津、福田、松浦、小山、松田、O.B 松田、黒沢、奥谷さん。

目的、登山の一技術であるスキーの基礎訓練

ザイラーと共に来た空前のスキーブームは車日列車をスシ詰めにしていた。僕達の上乗も難事を極め奮斗した甲斐もなく四等寝台に落着いた。僕と加藤、小杉山は化粧室にもぐり込みはしたものの夜が更けるにつれ骨の髄迄凍りつくかと思われる程冷えたのには音を上げた。長野は、夜明けてまもなく冷えくくした朝だった。一足先に立った本校のスキー教室達と長野電鉄に同乗した。車中の混み様は一層激しく須坂に降りた時は加藤、和田の二人がもれてしまい松田さんが二人を待って下さった。

山田から一列縦隊で七味へと。途中渚に掛かる十数メートルの大つららが目を奪った。字間を流れる川を前にした七味温泉には、直に黒沢さんが宿のコタツで待ち構えていた。遅食後初陣の若武者よろしくスキーを肩に牧へ。この時遅れた二人が神妙な顔つきで到着。三パーテイを編成し平地滑走、ステップ及びキックターン直滑降を教わった。ままならぬ足の下の長い板、へっぴり腰で滑り出し大きな穴をあけて止まるのがこの半日の成果だった。

温泉につかって初滑りの喜びを語り合い九時就寝。

二日目、直滑降、全制動、半制動を学ぶ。晴れた日射しの下で各人盛んに練習し直滑降だけはどうやら身についた感があった。前日と変わって牧場から宿迄滑り下ろされ曲り角に来る度転んで宿につく迄三十回前後の転倒で体は歩だらけとなってしまった。夜食後はランプの灯でトランプをし、寝る前に一風呂浴びてまさに天国だ。

三日目、冷たくおいしい漬物で朝食を楽しみ牧場へと出発した。前夜からの降雪で僕等のあけた穴は平らになっていた。前日の復習とボーゲンが課題であった。さすがに転倒もし

なくなり各人なりに成果を表わし始めた。終日雪が静かに降ってゲレンデは最良の条件を提した。スキーが一本折れた他は、この日も練習に汗をかくうちに終った。

四日目も朝のうち雪は降り続いたので視界はきかなかったが、水墨画の絵そのままの空の色と山でそれなりに美しかった。一応の事は習ったので、三十分近く登って滑り下りたがようやくスピードにも慣れ、耳の後で風のうなりを聞きながら滑った気分の良さを味わえた。午後は回転競技のまね事をしたが、黄岳のアメの大半は一年生に持っていかれてしまった。山行とは勝手が違ってどうも一年生の方が早くうまくなってしまったようだ。後半日となると名残の惜しさが増して来てタップリ湯につかりお菓子を食べながら渓谷の音しかしない山奥の宿で更けて行く夜を西校の山男達は心から楽しんだ。

四日目はこれを名残りと昼迄滑り宿に帰って出立の用意に急いだ。世帯づれした山岳部の執念から見ても、ここの食事もなにもかも大したものであったので、十分満足であった。居残る野原、小杉山の見送りで山田へ向かう途中、見返した山が印象的であった。長野の街で信州そばで腹ごしらえをして、疲れた体を汽車のシートに治まった時、改めて楽しかった数日を思い出した。大晦日の上野についたのは夜もまだ明けぬ頃。解散後朝帰りの客と共に家路へ急いだ。

鷹ノ巣山 二月山行

立川	発	2:25
永川	着	2:40
〃	発	3:45
日原	着	4:25
	発	4:30
テント場	着	5:00
食事	寝床	8:05
就床	食	10:30
起	発	4:00
朝食	発	6:00
日原	発	7:15
大ワビレ		10:20
	発	10:30
己ノ戸大クビレ		11:45
昼め		12:20
己ノ戸大クビレ	発	2:04
広ノ巣	着	2:35
	発	3:00
〃	石笠	4:24
六縞	着	5:30
氷川	発	6:08
		6:45

十月の山行からスキー合宿をのぞくと山に来るのは約四ケ月ぶりだったので皆フアイトに満々ていた。しかし遅刻者が多くテントの設置が遅れてしまった。しかしその遅れも幕営地の勝手が六月に来たことがあったので、わかっていたので最小限に食いとめることができた。食事は一番大きなテントに皆集って食べた。四ケ月ぶりの山の飯に皆舌づつみを打った。その後廣岡の小林先生から今後の山岳部に対する学校側の方針をうかがった。それは我々にとってあんまりかんばしいものではなかった。しかしその陰気な気持をコンパでふき飛ばして、十時頃皆各自のテントで眠りについた。

二月十四日

六時半に全員元気で出発した。すこし行くと二・三日前に降った雪が見えはじめた。自分ら一年生にとって山での雪はスキーをのぞいては初めてだったので、嬉しさと不安とが混じりあった変な気持だった。それからしばらくは沢そいの道を皆黙々と歩いた。そのうち一年が一人バテ始め二年生が一人ついて後からついてくることになった。それから夏山の徳本峠を思わせるような登りにかかったが、それも約一時間で着き最初のクビレに出た。そこからはじめて奥多摩の山々を見わたせ、自分が山に登っているという実感が腹にきた。そこも後の二人が追いつかないまま出発した。それからの道には雪が20cmくらいあったが、歩行にはあまり影響しないけれど、また一年が軽い目まいで一行から二年生と二人で離れた。そして

三ノ沢大クビレに達した頃は全体が五パーティーに別れるという最悪な事体になってしまった。しかし約三十分後にはそのクビレに全員集まって、待望の昼食にした。しかし予定のコースであるヒツ石山には時間の都合で行けなくなり、お茶を飲みお菓子をつまんでそこを出発し、广ノ巣山に向かった。三六十度の展望がきいた广ノ巣の頂上で競図訓練を終えた後、氷川への帰路についた。雪をうっすらとかぶった奥多广、奥秩父の山々、その中でひときは高くその雄大な姿を見せている富士が非常に印象的であった。

参加者、

二年、野原・吉田・小杉山・高橋

一年　山本・板垣・小津・福田・松浦・小山・松田、

顧問　小林先生

個人山行

庶沢スキー

二月二七・二八日

二月二七日夜十一時中野駅集合。小杉山・山本両君が見送りに来てくれた。間もなく出発。参加者は現役四人、先生二人。それにOBその他多数だ。労基法だかによって夜なので男の車掌、何とも奇妙なものだ。翌早朝後のタイヤがパンク。しかし目的地には予定より大分早く着き、夜の明けるのをバスの中で待った。新鹿沢あたりは雪もほとんどなかったので旧鹿沢の方は、と心配されたが一応すべるには十分あった。しばらく暖かい天気の続いたせいか、表面がとけて、又凍った様でがチくしていて七味温泉の時とは大分様子が違った。ゲレンデはかなり広かったがアップヒルになっていないので適当にころばないとヤブにつっこむ。かくて自由にすべり出したが午前中はどうも怖じ気づいてしまって思う様には行かなかった。午後はOBの人達の間で回転競技が行われた。非常に面白く拝見させていただいたが、さすが東工大のスキー部の人はうまかった。先生方は競技には参加されなかったがナゾ子さん等学校ではめったに聞かれぬ様なさけび声を発して楽しんでおられた。やがて四時過ぎ頃帰路に着いた。デコボコ道をはずみながら行った挙句、又々故障。今度はブレーキがどうとかしたらしく一時間ばかりエンコ、夜丁度十一時に中野駅に着き解散。総じて非常に自由な、というよりむしろ自由すぎて何をしてかいか迷う程のスキーの一日ではあった。

雲取飛龍山

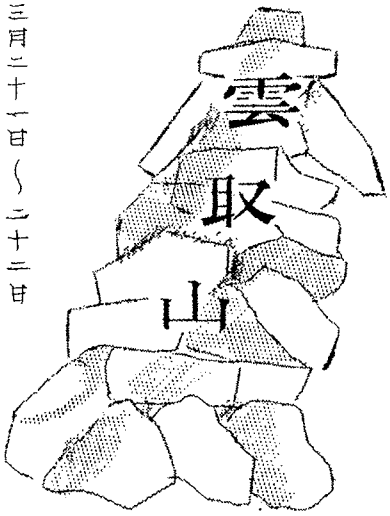
三月十七・十八日

メンバー　野原・福田

天気は快晴、荷物は軽く、全く申し分ない山行日和であった。時間通り日原へついた時、可愛い女の人が登って行った。実際一緒に登りたかった。しかし、こっちの気もしらないでさっさといってしまった。あとから聞くと要取に自分達よりも五時間以上も遅くついたそうだ。全く情ない話だ。暗くなりかけたカラマツ林道を、とまって、又少し行って、チョンピリ凍った雪の上をすべって登っていた時、雲取山屋につけるかしら？と思った。実際、自信はなかった。あとでリーダーも、ビバークの事を考えていたといっていたが、

それにしても春のカラマツ林道の、去年から積もっている落穂がすばらしかった。谷川のせせらぎと風の音、日のまさに沈もうとする山の景色は記せられぬ。ゆっくり〜〜全く人の二倍も三倍も時間をかけて雲取山頂上へついた時は、空には一面星がまたゝいていたようであった。そこから小屋迄それこそ五倍六倍もの時間をかけて、やっとついた時は、九時にもなっていた。リーダーは「御前はいつも目的地につかないから無理してもここまでこさせたし」といった。山が眠っている夜に米をとぎに水場の川の、凍った氷をコツ〜〜たたいて割る音は、非常に寂しかった。

二日目、飛竜―前飛竜への下りの道は実に和やかであった。うぐいすの啼く声も聞かれ誰れにもあわなかった。前飛竜から上って、また道に雲のかげの映るのが見えた。はるか遠方に雪の　アルプスがのぞまれた。鴨沢へおりたのは、最終バスの数十分前であった。この文は、景色の事ばかりであるが、実際は最初から終りまで苦しかった。ハイキングコースというが、いつも苦しい事ばかり書くので、今度はさも楽しそうにこう書いた。しかし自分は、山岳部員たる資格は零だとはつきりこんどの山行で自覚した。



三月二十一日〜二十二日

メンバー　山本・小山

曇空の中を六時五分立川を発つた。三人の予定がY君不参加で二人だけとなる。氷川からしばらくして雨がふりだし、熱海口では盛んにふっていたがすぐ登りにかかった。最初から急坂で青々と水を貯えた奥多摩湖ものんびり眺めてはいられない。しばらくそんな急坂ばかり続いたが、風雨が一層強くなってきたので、あきらめて引返すことにした。再び湖畔に戻りバスを待っているうち、天気が好転してきたので計画を変更し鴨沢から雲取へ行くことにした。

鴨沢からはたいしたこともなく、黙々と歩く。空は依然として厚い雲ばかり。時々小雨もちらつき風も吹いてくる。七ツ石に近くなると勾配も増しピッチも遅くなる。強くなった風とぬかるみと戦いながら七ツ石の山頂に立つも、雨まじりの冷たい風に吹きまくられ下の岩かげで休む。雲がどんどん尾根を吹きぬけて行く。展望などまるで望めない。早々にそこを出てブナ坂まで一気に下り雲取に向かって尾根伝いに登って行く。風はいよいよ激しく吹きつけ、小屋は雲取手前の奥多摩小屋に変更、そして雲取は明日にのばした。小屋には比較的早めに着き、しばらくくつろぎ、そして夕食も早めにし床についたのは七時すぎであった。

二日目、起きるとなんとなく寒い。零下九度とのことで、雪もちらついてきた。まわりの山はうっすらと雪化粧。そしてうっすらとつもった雪を踏みしめて雲取に向った。雲取山頂には五十分程して着いたが、雪はまだちらつき、風も強く冷たい。周囲の山々はよくみえないが、雲海が三六〇度に広がっていた。下りは三条の湯を通って鴨沢におりるコースをとることにした。登ったりおりたりのだら

だらした長い道を下り、鴨沢に着いたのは日が傾むきかけようとしている頃であった。今回の雲取山行は天候にふりまわされて、不運な山行であったようだ。

二一日（月）雲のち雨強風

立川集合（6.00）―立川発（6.05）|電車|氷川（7.25）|バス|慈海口着（7.48）発（8.00）―休み（8.24）発（8.46）―引きかえす（8.58）―慈海口着（9.18）、発（10.18）|バス|鴨沢（10.45）―カンバ沢通過（11.12）―休み（11.47）、昼食、発（12.00）―休み（12.45）発（12.50）―休み（1.25）、発（1.30）―七ツ石小屋通過（1.43）―分岐点通過（1.57）―七ツ石山頂（2.07）昼食、発（2.25）―ブナ坂（2.33）通過―奥多摩小屋着（3.00）

二二日（火）小雪　見通しきかずのち晴

奥多摩小屋発（7.37）―分岐点（8.00）―雲取山頂（8.25）、発（8.50）―休み（9.56）、発（10.5）―三条ノ湯小屋通過（10.06）―休み（11.00）発（11.03）―分岐点通過（11.15）―昼食（11.22）発（11.46）―お祭通過（1.30）―戸畑通過（1.46）―鴨沢通過（2.03）―深山橋着（2.38）発（2.53）|バス|氷川着（3.32）、発（3.55）|電車|立川着（5.08）解散

長沢背陵

メンバー　板垣、小津、松浦

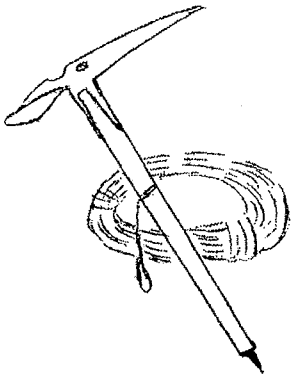
コースタイム　三月二〇日　六.三九立川発、八.〇〇氷川着、八.〇八発、九.〇八親川着、九一五親川発　九.三五高畑通過、一一.四〇御岳沢出合通過　一一.五八権現谷、昼食、一二.五〇権現谷発　一一.一二サオラ峠分岐　一一.三五三条小屋着、一五〇発、四.〇一三条ダルミ着、四.二〇発、五.二〇雲取山頂着　五.二〇発、五.四一雲取小屋着　八.一五就寝

天気予報は雨だったが、かなり良く晴れていた。先日の土砂崩れで、バスがどうなっているか心配したが、その場所でバスを乗り継いで、予定通り親川に到着、停留所のすぐわきは高畑部落への登り口があり、かなり急な坂を登って行く。一時間毎に一〇分の休みを入れ、その都度オーダーを入れ変えた。休みには地図を出して良くながめたが、地図に書いてない沢を、書いてある沢と間違えたため三条沢とと思って、昼食をした沢は、権現谷であったらしい。昼食は、各自持参の物を取り、他に、コッヘルで紅茶を出し、ミルクやミカンの汁を入れて、複雑な味を味わった。その後、沢を二つ越して、ようやく三条の湯につく。そこで休みを入れ、しばらく、水を飲んだり、下の河原でキャンプしている大学の大部隊をながめてから出発。急降下して、河原におり、それから今度は急登、かなり早いピッチで進んだが、途中で先頭に立っていた僕の足がつり出した。右がつったかと思えば左、左かと思えば右という具合で、皆にもんだり、たたいたりしてもらって、それでもようやく三条ダルミにたどり着く、その頃は雲が陽をおおい、強い風が吹いていた。普通より長い休みの後、雲取への最後の登りの少しぬかる中を、一歩一歩ゆっくり登って、雲取山頂に着いたのが予定より一時間遅れて、五時であった。陽は急速に傾き、寒い風が僕を震えさせた。頂上からは北から東にかけて明日、僕らが行くであろう長沢山、水松山、天目山の山波が川苔へと続き、西には　飛竜遠くは八ヵ岳の面々がながめられた。二〇分

稜線上から、山の家へ向って、暗い林の、凍っている道を、すべりながら下る。小屋に着いて、さっそく夕飯を作り始める。献立は、すき焼、ねぎは少しにがかったが、まずまずおいしく食べ終ってすぐ床に入った。小屋には、暗いランプがあるだけなので、ろうそくを持っていかなかったのは、失敗だった。

二一日。前夜ひどく風が吹いていたので、どんな天気かと窓越しにのぞくと、向うに雲が赤く照っていたが、外は雨が少しぱらついていた。七時に小屋を出る時には、雨が強くなったので、ヤッケを着て出発、大ダワを過ぎて芋の木ドヲケで第一休止を取る。それから道は巻いたり、尾根に出たりして、ところどころ雪が残っていた。風はいぜん強いが肌が引きしまって気持ちが良い。くもってはいるのだが、かなり遠くまで良く見えた。長沢山を過ぎるあたりから風も弱まり、あたりも大分明るくなったので、ヤッケを脱ぐ。それからは、歩きやすい道を、僕の他の二人は買ったばかりの靴で、まめを作っていたが、それでも快調に登り下りを重ね、天目の無人小屋で昼食をとり、その後も、快調にミツドツケまで一時間二〇分を休みなしで歩き、そこから、日原発三時一五分のバスに乗るために、急な下りを、滝入山を過ぎるあたりまでかけ下り、少しつかれて、下に日原の部落を見下しながら、じりじりとして、いまにも笑い出しそうな足を拘束的に動かしながら、部落に着く。バスに充分に間に合う時間だった。近くで、顔を洗い、頭を冷して、今、降りて来た方をながめ、うぐいすの声を聞きながらバスを待つ。三時過ぎ、予定より少し早目に来たバスに乗り込む。

（小津記）



— 1959年度 —

夏山合宿

記録

はじめに候補としてあがったコースは、1 立山〜槍縦走並びに涸沢定着合宿、2 上高地〜焼岳〜槍見温泉〜笠ヶ岳〜双六〜槍ヶ岳〜横尾〜涸沢定着合宿 3、表銀座縦走 以上の三つで他に南アの縦走も話題となったが、直接計画立案にあたった準部員達は1を強く希望した。ところが老令の先生の多い学校の顧問会は縦走計画に難色を示し、顧問の先生が途中で交代できる定着合宿を求めてきた。そうした学校側の意見を考えた上で西明登高会（山岳部O.B有志による山岳会並びに現役監督指導技術）の委員会でO.Bの援助と助言を求めた。ところが今まで現役指導にあたってきたO.Bが就職期の為参加出来ず、社会人のO.Bには殆んど暇がない。その上準部員のうち冬山経験者が零、春山・夏山経験者がわずかに三名で、新入部員が十名という多数、こうした現役の弱体もあわせて前記の計画は全部無理という結論に達した。なお又、ことごとく山岳部を圧迫するかのようにみえ、「外部団体であるO.B会が学校内部の山岳部問題に干渉するのは許せない」とする学校側の態度に腹をたてた西明登高会は

「今後山岳部に一切関与協力せず、学校側に全面的指導を期待」との強硬態度を決定し、なお「校長自ら合宿に参加し、部員の気持を理解し山岳部問題改善の誠意を示す時は、西明田中リーダー以下合宿に参加して全面的に協力する」との留保条件をつけた。校長参加という難しい条件を抱えて好意を示さぬ学校と協力を拒絶されたO.Bの間にはさまり、現役は全く途方にくれた。「こうなってしまったら十五年前の部創立当時に逆もどりだ。何もかもはじめからやりなおせ。自分の体を張って、危険から下級生を守ってやれ」という O.Bの声がいつまでも耳に残っていた。「よしこうなったらO.Bなどに何を頼むものか、学校もいらん、必ず俺達だけで立派な夏山をやってみせるぞ、見ておれ！」こうして漸く川田リーダー以下現役の間で合宿計画の繰りなおしがはじまった。精神的、肉体的力の限界を少しでも知る為にも是非縦走の形を残したいし、といって、学校にけられたら中止せざるをえないから、その意向を無視することも出来ない。その上現役の力で危険なく実施出来るところでなくてはならないし新入部員には北アルプスの感激を味わせたい、とい

うことで結局前記のコースに落着いた。こうして、半ば悲壮な気分の中で、O.B不参加、二年準部員わずか三名というここ数年にない形で午前七時〇分新宿駅を発った。

八月三日

例年のように夜行ではないのですごく快適「これからは朝の汽車に限る」とたちまち衆議一決。超満員のあのむせかえるような夜行に比べると天国のよう。移りゆく窓外の景色をながめながら涼風にふかれる。昨日仙人裝準備の帰り路、自転車からころんで足を切り突然参加出来なくなった、吉田のことを想いながらトンネルをひとつ越えると松本平が一望出来る。やがて島々駅に降りたったのが二時。加藤を先頭に長い行列が牛のように黙々と歩きだした。新入部員八貫〜八貫五百、二年の準部員十一貫、焼けつくような日射しの下、憂うつな島々の谷を分け入る。島々駅から二時間ばかりのトロッコ道の下の河原にテントを張る。

八月四日

今日が縦走の山場になる。今日のうちに徳本峠までゆけるかどうかちょっと自信がないが、といって途中の坂道でテントを張るわけにもゆかずどんなに遅くなっても峠までいかなければならない。

幕営地をたつとすぐに軌道がなくなり、緑はますます濃く谷はいよいよ深くなった。燃えるような緑と涼し気な谷川（これも重荷を負った僕達には味わう余裕がない）その外には、それこそ何ひとつ見るべきものもない重くて、苦しいだけのくそおもしろくもない今日の行程、薄暗い林の中、時々ちらっと日光が眼に入る。鍋沓で昼食をとり、歩きはじめる。昼食までは、去年の僕達とは比較にならないほど元気だった一年生もぼつぼつ苦痛を訴えはじめた。「背中がいたい」「荷物が多い」「足がつる」。そのうちに道にしゃがみこんだり、倒れたりする者が出てくる。怒鳴りつけて無理に立たせ後からこずきながら歩かせる。十一貫をしょって一年生をしごくのは、ものすごく苦しかった。しごくのが、これほどつらいこととは夢にも思わなかった。苦しいのをやせがまんしながら、しごいても歩いてくれないと、ほんとに泣きだしたくなる。二つちが座り込んでしまいたいくらいだ。絶叫してしまいに声が出なくなってしまって到々、三年の川田さんに代ってもらって僕は大部先に行った本隊を追いかけた。やがて沢が切れて水もなくなり、いよいよ、ジグザグの最後の登りにかかった。二、三の者を除いて一年生は皆意外に元気で二年の方が弱り気味の感じすらあった。時々後から橋本さんのハリのある声がかかる。松浦や板垣が元気でよく声を出して一年同志励ました。万削も時々タイミングの合わないで気合を入れた。七まがり八まがり、何回まがっても峠に出ない。空はすぐそこに見えているんだが。一年の時ベソをかきながら登ったのを思い出す、どうだろう、一年の時より少しは楽だろうか、否全然楽になっていない。よろやく峠につくと足がガクガクし、頭がふらついてしばらくはたちあがれなかった。十一貫負っての徳本越えは僕の身にはこたえた。

折りからの小雨の中、リーダーにしったされながら急いでテントを張る。一年生は元気でよく働く。向い側の穂高連峰には雲がかかっていて、一年の時の僕達のような感激を味あわせてやれないのが残念だ。四苦八苦して登った徳本からはじめて見た北アの穂高の英姿は今も僕の胸裏に焼きついて離れないでいる。こうして、今年の一年生も岳人の卵らしい。

徳本越えというオーソドックスなやり方で、初めて北アルプスに接するわけで、そういった意味でよかったと思う。

暗くなって晴れた夜空の星は一際大きく美しかった。昨年涸沢で仰いだ星空を想い出しながら明日槍見平で見る北アの大パノラマはきっと素晴らしいだろうと思った。

八月五日、徳本峠――大滝山

昨日熱があって心配した田中も元気になって、朝六時すこし前に皆そろって峠を発った。穂高の見えがくれする林の中をもう三分の二も歩いたかと思われる頃、ひょっこりと槍見平に飛び出した。素晴しい晴天と岩の黒、雪渓の白この三つが何とも云えない絶妙な調和をなしている。ここを過ぎるとあとはもうただ暗い林の中、平らなだらだらした道でまわりが何となく湿気ておりこれが意外に長い。ながめるにもながめる景色がない。いったい地図上のどのへんを歩いているのか確認したくてもどうしようもない。嫌な道だ。道は尾根伝いではなくて、松本側にすこしずれてついているらしい。それに大部まがりくねっているから地図上で計算した時間より大部余計かかるから注意した方がいい。ただ、道は一本しかないからまちがいようもなくその点楽だ。

いい加減いやになった頃急に右前方が明るくなって表に飛び出し、大滝への最後の登りになる。ひざ位までの這松とところどころに赤や黄色のお花畑が美しい。二〇分ばかりで頂上につき思いきり手足をのばして這松の上に寝ころんで穂高を見る。今年は昨年よりずっと雪が多い。涸沢入りが楽しみだ。

大滝小屋際には泥沼しかなくて、いくら僕達でも飲料には出来ない。仕方がないから山頂から十五分ばかり蝶側に下ったわずかに残った雪渓を使用した。

夕暮の縦走路から見るとうす桃色の雲塊の上に剣から槍への縦走路がぼうっとかすんでみえる。知らない間に限りなく静かで和やかなやさしい自然のうちに沈みこんでしまう。はっと我にかえると、蚊にさされた肌が赤くはれている。大滝の蚊の猛烈なこと、久しぶりで吸う人の血の味がたまらないらしい。合宿に蚊取線香を忘れたことが何とも悔まれる。

八月六日、大滝山――蝶ヶ岳――横尾

今日も晴天、夜明けの美しさといったらない。爽快な気分で食べるから朝飯の量も自然と増えてくる。小杉山達のつくった今朝の飯は中々うまい。僕は量は皆に比べてそれほど多くないのだが、食べるのが遅くて一番最後までもそもそやっているものだから、あたかも一番大食漢のような印象をあたえて、とても損をしている。胃大な今井先輩や歴史に残る小杉山の食いぶりに比べたら実に微々たるものなんだ。

今日は縦走最後の日、常念から一の俣のコースは荷物があっては無理だし台風で荒れているという小屋の話で予定を縮少して蝶ヶ岳から横尾に下ることになった。

左手に大パノラマを見て肩の低い明るい緑の中を一気に蝶ヶ岳までゆく。この辺カラー写真に絶好の舞台。

蝶ヶ岳から指導標によると、横尾まで二時間のコース。蝶で昼食をすませて一気にかけおり、荷物があるからそれほど飛ばせないがそれでも「下りは西高山岳部はかけおりるし」という原則通りに降りた。足をねんざしている川崎にはこの下りは可哀想だった。

テントを張り終った頃、三年の田辺さん、高橋さんと中沢(義)先生が到着。河原で、高橋さんのかついできた西瓜にかぶりついた。

晩はライスカレー、肉がすこしくさかったけれど盛りもり食う。昨日あたりからきかなくなった小津の左手が更にひどくなって靴ひもも結べないくらいになったのが目立つ。篠崎先生下山。

八月七日　槍ヶ岳

朝6時15隣の山脇女子短大のテントにおくられて槍ヶ岳にむかう。なにしろ今日はサブだからまるで軽い。一の俣まで平らな道は殆んど駈ケ足。槍沢小屋をすぎて坊主岩小屋まで登りつめるとグッと迫った槍の穂があらわれた。岩小屋から二つ上の雪渓で滑落停止の練習をする。手のきかない小津とびっこをひいている弓削は下で見学。練習をおえて肩の小屋から頂上にのぼる。そろそろ人が行列していて頂上は満員、あんまり人が行くので槍の穂先は年々丸くなっているとか。途中では変なおっさんが妙な関西弁で交通整理をしていた。何ともつまらないこと。この上なし。

帰りは得意のかけ下り、頂上から横尾までワンピッチで降りた。一年生誰も音をあげることなくおしまいまでよく頑張った。

今晩は僕が食当なんだが、献立は中華ソバとピーマンのみそ煮。ピーマンは田中が晩を

ふるってうまく出来たがソバ係り主任の僕はどうも自信がない。提案者の肝心の吉田がいないから心ぼそい。何しろ今まで味噌汁とブタ汁とライスカレーぐらいしか知らない西高山岳部として初めての試みなのだ。どうにか出来た作品は意外に好評で弓削などは四人前も食べた。

八月八日　涸沢入り

朝、川田さん、橋本さんが下山。CLは今日から田辺さんが務める。

台風近ずくの報で涸沢から続々と下ってくる。だから僕達が入った時は例年の今頃に比べたら、すごくすいていた。その上雪が多いそれこそ絶好のコンデイション。

ところがあいにく夕方から雨にまじって風もふきだした。営林署の人が荒れるからテントをしっかり張るように、不完全なテントは小屋に避難するようにと伝えてまわる。この雨の中あわてて涸沢をおりる人も多くテントの数はますます少くなった。

ふっと目がさめると，毛布がぐっしょりぬれている。僕達のテントはNo.6だから水の通しも一番良く、顔のすぐわきを水がちょろちょろ流れている。ひどい斜面に張ったものだ。

口から顔を出すとつぶれたテントが二つ三つあった。自分達のテントも心配になって外にでてまわりに石をつみなおす。溝など掘っても効果がないから水の流れ込むのはあきらめる。丁飛ばされるといけないからポールを握っていようしと云って田辺さんはポールにしがみついた。僕は眠くてたまらないから又水の中に寝た。

八月九日　停滞

この雨と風の中では食当の加藤達が気の毒だ。今日は一日停滞と決定、ラジウスで全身びしょぬれの衣類や毛布を乾かしはじめたけれど、又すぐぬれてしまう。何もしないでいるとぬれた全身が気が狂いそうに不快だし、気が滅入ってしまうので、朝から晩まで歌を唱う。歌に疲れると輪切りにしたソーセージをマーガリンでいためて食った。夜垣はあまり食いすぎて下痢をし、一日でほおの肉がげっそりおちた。以来夜垣はソーセージが食えない。

八月十日　奥穂高、滑落停止

どうやら風雨もおさまった。晴れてはいないから屏風岩の陰からの素晴らしい日の出や日の出とともに涸沢嶽の岩が七色に変わるの

が見られないのが残念。

ザイテングラードから奥穂にのぼりそこで僅かのラジオで松川事件の最高裁判決をきいて後ジャンダルムを往復して帰った。午後から五六の雪渓のずっと下の方で雪渓訓練。O.B がいないから厳重正確な訓練の出来ないのが残念だ。

八月十一日

今日は下山。荷物をまとめて涸沢を後にする。横尾をすぎ徳沢をすぎ、かけ足で上高地に達する。トップが田辺さんだから、その速いこと速いこと。上高地に入ると、サングラスにショートパンツの美しい婦人達が顔をしかめて僕達を見る。「まあ、山賊みたいし あかとあせ、ほこりで悪臭を発散し、びっこをひいている僕達の行列はそうみえたかもしれない。云われて、急に自分達の姿がこの場にそぐわないのを感じて妙にさびしくなった。上高地の風物は美しいけれど洗練されていないこの避暑族は山をめちゃめちゃにしている。このなことなら一日かけてもやはり徳本越えして帰るべきだったと思った。

バスにゆられて島々に向う。内容的に決して秀れた夏山ではなかったけれど、わずか二人の正部員と弱い弱いと云われた僕達準部員こうした現役の力だけで曲りなりにも、成し遂げることが出来たことは何とも、うれしかった。この山行による僕達の自信と山登りに対する前向きの意欲は、これから先、決して無駄にはなるまい。こんな気持と安堵感のうちに、いつの間にか窓にもたれて眠ってしまった。

（二年準部員　野原記）

（一九六〇・八・六・記）

メンバー

川田（L）、田辺（L）　橋本・高橋・加藤

小杉山、野原、弓削、和田、川崎、山本、板垣、小津、田中、松浦、小山、三和、篠崎先生、中沢先生

コースタイム

八月五日

新宿発7.00　松本着12.15　島々着2.00　発2.14、休み3.00　発3.20　テント地着3.55、就寝7.00

八月四日

テント地発6.05－休み6.45発6.55－休み7.35発7.45－休み8.30、発9.40－岩魚止小屋9.45（昼食）発11.15－休み12.05発12.15－休み1.00発1.10－休み1.50出2.00－徳本峠着3.05

八月五日

徳本峠発6.39－休み7.15発7.25－休み8.13発8.25－休み8.55発9.05－休み9.45（昼食）発10.20－槍見台着11.00発11.10－休み12.00　発12.10－休み12.43、発12.55－休み1.35（昼食）発2.05－休み2.55、出3.05－大滝山着3.35、発4.15－テント地着4.40

八月六日

テント地発7.30－休み8.18、発8.25－休み9.02、発9.10－蝶ケ岳9.22（昼食、蝶ケ岳本峰へ）11.00発－休み12.15、発12.25－休み1.25発1.35－横尾着1.55

八月七日

横尾発6.15－一ノ俣着6.55－休み7.35、発7.45－休み8.15　発8.25－9.38（昼食、雪状訓練）発11.55－槍ケ嶽1.24、発1.35－横尾着5.03

八月八日

横尾発8.55－本谷10.25、発10.37－涸沢テント地着12.10

八月九日

三国沢停滞（台風のため）

八月十日
テント地発8:35－奥穂小屋9:35、発9:40－奥穂高嶽10:15、昼食（三年、二年、一年（2人）はジャンダルムへ）12:50発－テント着1:50
テント発3:10、雪渓訓練5:50　テント着
八月十一日
涸沢発7:35－本谷8:10通過－横尾8:50、発8:55－徳沢園9:15、発10:17－明神館前10:50、発11:00－上高地着11:30（昼食）発（バス）12:30－島々着2:28、発3:28－松本4:05（自由時間）発8:30発
八月十二日
－新宿着4:30　解散4:45

器具表

品名	小計	合計
ラジュース(2)	五六〇	三三六〇
石油コンロ(1)	二四一〇	
台皿(3)	三九〇	
ガソリン		
ラジュース(1)	四三〇	四〇八〇
石油	九七〇	
テントNo6一式	二六八〇	
テントNo8一式	二九五〇	

品名	小計	合計
ツエルト	四四〇	四〇一〇
ナタ(4)	五二〇	
ウチワ(5)	八〇	
食器	二〇	
テントNo10一式	三一四〇	四〇一〇
ペグ	八七〇	
テントNo11一式	二一四〇	四〇二〇
ナタ	五五〇	
ナベ（全部）	一〇一〇	
ローソク	三二〇	
ザイル	九〇〇	三二六〇
スコップ	五一〇	
細引	一〇〇	
ライポンF	一四〇	
温度計	二〇	
タワシ(5)オタマ(3)、ホウチョウ(3)、メシヘラ(3)、メジャーカップ(2)	二四〇	
洗鍋	二五〇	
フライ・火吹竹・グランドシート、ノコ(2)	一九〇	

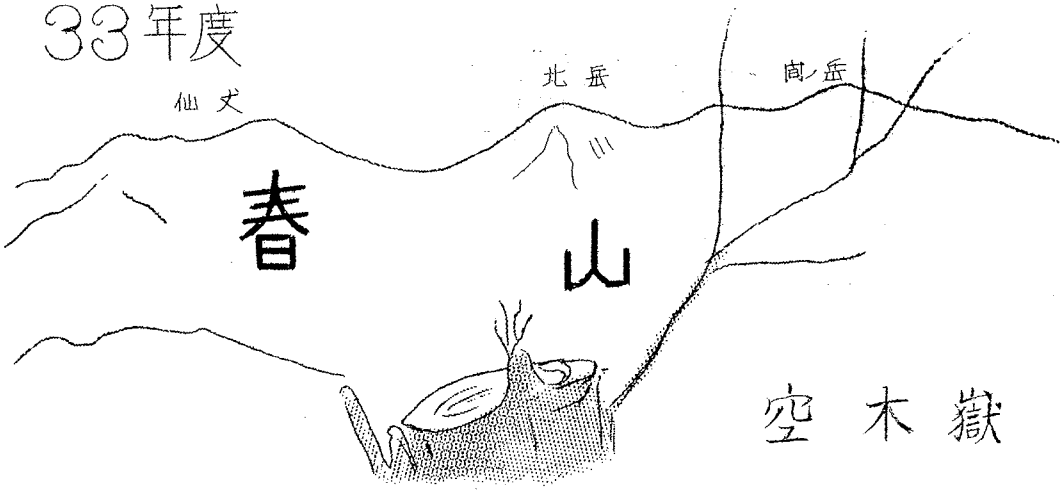
鍋ブタ	六二〇

献立表

A	わかめの味噌汁
B	ふの味噌汁
C	野菜汁
D	おじや
E	Aランチ
F	Bランチ
G	Cランチ
H	Dランチ
I	豚汁
J	野菜・肉スープ　ユゲジル
K	ライスカレー
L	たきこみごはん＋味噌汁
M	中華そばとナスの味噌あえ
N	散らし寿司

日		
3日	夜	I
5日	朝昼夜	CEL
7日	朝	C
8日	昼夜	FM

33年度



空木嶽

我が山岳部一年間の集大成である春山を空木岳にしようと決ったのは、夏の頃であった。この空木岳においては、世年度で敗退しているので、今度こそはと、大いに斗志を燃やし夏山合宿が終るや、川田さん高山さん秦さんが才一次偵察を行い、続いて十一月の初め、梶内さん田辺さんが才二次偵察をして着々と準備を進めた。又、冬休みには八ヶ岳で春山訓練合宿を行ったが、新人の不参加が今回の春山の価値を低めたのは、否めない事実であろう。翌年二月爽多ケ原で春山準備山行を行って来るべき春山に備えた。そしていよいよ三月、期末試験の最中に各係は奮戦努力して、十三日には準備完了、翌十四日にはパックを行った。当日、全員部室に集り、訓辞をリーダーから受ける。「今回は絶対成功しよう。皆がッチリやろうぜ」と、全員大いにファイトを燃やし想いを白銀の空木へと走らせた。

三月十五日

例の零時五分前の列車に、全員座席に坐り、三年生に見送られて、新宿のネオンを後にした。結局、総数十二名は、川田、梶内、高山田辺、秦、高橋（鈴）、野原、高橋（通）、吉田、加藤、O.B飯塚、内谷となりました。

三月十六日　晴

朝霧の立ちこめる天竜川をながめて、総勢十二人が赤穂の駅頭に立った時　雪を載いた中央アルプスがまばゆかった。すぐさまバスで駒ヶ根鉱泉へ行き、轍の深い田舎道をノソノソと歩き出した。うららかな春の日ざしに、畠ではかげろうがゆらめく。枯れカヤの山道をわけて森林帯を抜けたところに水場があり朝食を摂った。水場を左に登ると大きく開けた坂道になり、日がガンガン照りつけ息苦しい。十二貫のザックがガッキリくいつき、まるで自分を地べタに押し込まんばかりで、汗がソイツイと体中をつたい流れる。そして一歩一歩踏み出す毎にポチポチしずくして、乾いた土にしみ入って行く。こうした枯れカヤの続く開けた山道を二時間程登ると、枯れた大木の幹の所で道は二俣となる。

我々は左の道を進んだが、道は下り気味で沢に出る。二年生はO.Bと偵察に行き、結局もとの二俣にもどって昼食となった。はてしなく続く南アルプスの山なみに、皆はしばし昼飯の手を休めて感激する。右の道は山腹を大きく巻きうねっている。荷の重さも感じなくなり、池山小屋に着いたのは静かな夕暮時

の四時であった。その晩はグッスリと眠る。

三月十七日　雪、零下十度

四時起床。朝食のゾウニは実にうまく、皆はモリモリ食べる。五時半には、ルート構作隊が昨りしきる雪をついて出発、三十分遅れて本隊も出発する。池山を見下す急登はキツクステップで登って行くが実に苦しい。登り切るともの優しい林が続き、平坦になる。林をぬけると石岡ナギが不気味に口をひろげ風が冷くなる。そこでアイゼンをつけた。この先を左に回った所に、ルート隊はフイックスをしており、左側を削り取られた山腹を慎重に進む。アイゼンのガッガッと氷をかむ音が単調に続く。道は尾根に出て、かん木帯となった。雪の為に遠くは見えず、もっとも見る暇もなかったが、尾根がやせてきて、そこをしばらく進んでカタパンで昼食となった。プープー雪のまじった風が吹きつけるし、狭い尾根なので心持悪い。三十分して、矯木帯を抜けると大きな斜面にぶっかったが、急角度に左折して木も何もはえていない所を慎重にトラヴァースする。この場所で事故が起ったが、無事、全員ほっと胸をなでおろす。カラビナにザイルを通して

C1設営地への最後の急登にさしかかる。寒さは厳しく手袋が凍ってザイルを握ると滑るがそうこうして、午後三時には二千三百四十二米のピークに着いた。我々は非常に高度感を感ずる。南アルプスが芸術色のタモヤの中にひっそりと浮び、モッコリ雪をかぶった権木からトボサツシと落ちる雪が静けさを破る。

尾内さん秦さん関谷さんはこのピークに残り我々は駆け転がる様に BH に戻った。BH にも雪がしんしんと降り、寒さが暗闇といっしよにおし寄せるのを感じた。あたたかい天幕の中でボーボーなるラジュースの音を聞きながら緊張の連続だった今日一日をふりかえり、熱いミルクをすすった。

三月十八日、快晴

カラリと晴れた朝だった。高山さん、田辺さん、飯塚さんは C1へ出発した後新人は川田さんに付き添われて BH 移動の為に、八時に池山小屋を出た。ギラギラと雪でまぶしい例の急斜面で右側にくっきり宝剣がそびえていたらしいが、僕は荷の重さに見る事すらできない。林を抜けて昨日の石岡ナギのほとりに BH を建設する時に、折からの寒風は凄烈で息苦しい。ブロックを切り終ってから、グツグツとタ食のオジヤを作り始めた。その頃早朝 C1を出た三人は見事に空木岳アタックに成功し、下り始めていた。その日の夕方はアタック成功の為か話も大いにはずみ、愉快なタ餉となった。

三月十九日、快晴

二年生は C1撤収に出かけ、新人は BH を撤収するや池山へ下る事となった。

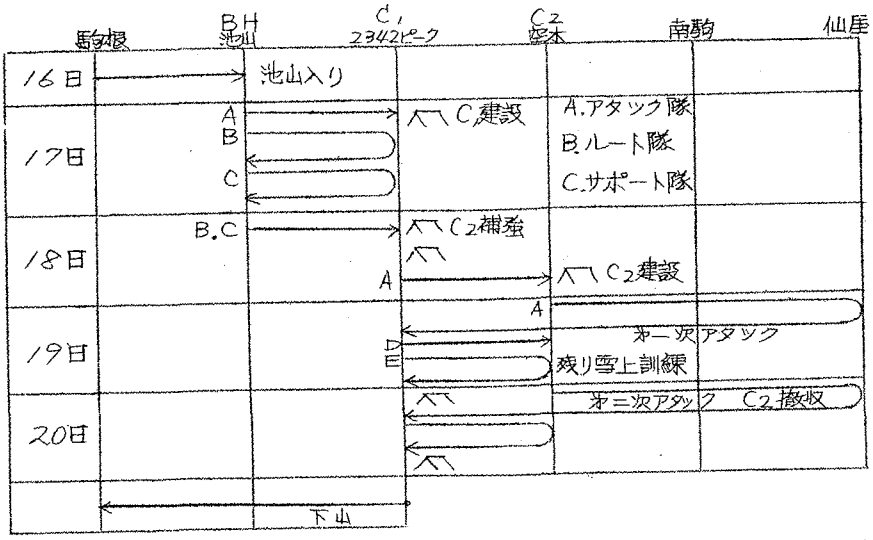
新人は途中で関谷さんの指揮のもとに幕営訓練を行い、池山に下って BH を再び建設する。関谷さんはそのままお帰りになられた。午後には池山に登る。今度は真青な青空と、宝剣岳を拝む事が出来る。その夜は最後なので歌を唱い、又語って山との別れを惜しんだ。

三月二十日　快晴

十時まではタリセード練習であるが、登ったり、滑ったり、実に回転が早く目まぐるしく疲れる。その後全員池山に登り、南アルプスに向って大いに合唱する。

仙丈、北岳、甲斐駒、間岳、二年生は一つ一つ教えて下さる。八ルカ向ラに八ケ岳が顔を見せていた。僕達は春を感じた。グリセードをやったあの斜面の辺にも、今こうして見ると春がやって来ているのを感じた。とにもかくにも我々の美しい合唱は池山にひびいたの

である。我々は塩っぽい餅と二年生が作って下さった特製シャーペットに舌づつみをうちなつかしい山々に別れを告げて、例のごとく山を駆け下りた。



	16	17	18	19	20
朝		餅、肉、玉葱、人参 ホウレン草 しょう油 干ダラ 茶	餅、肉、玉葱、人参、ホウレン草 ミソ、 メザシ 茶	餅、肉、玉葱、人参、ホウレン草 しょう油 干ダラ	餅、肉、玉葱 人参、ホウレン草 ミソ、メザシ、茶
昼		カタパン マーマレード ソーセージ 甘納豆	カタパン マーマレード ソーセージ ミカン	カタパン マーマレード ソーセージ 甘納豆	カタパン マーマレード ソーセージ ミカン、茶
夕	飯 玉葱 ジャガイモ 人参 カレー粉 肉 メリケン粉 福神漬 たくあん ラード 茶	飯 玉葱 ジャガイモ 人参 スープの素 肉 メリケン粉 コブ佃煮 ラッキョ ラード ミルク	飯 ソーセージ フレーク 人参 さつまいも しょう油 ミソ ニボシ ふ 梅干 海苔佃煮・茶	飯 玉葱 ジャガイモ 人参 スープの素 肉 メリケン粉 コブ佃煮 ラッキョ ラード ミルク	

一九六〇年 春山の偵察山行

(一) 春山の決定

今年は春山の決定がおくれ九月新しいリーダーがきまってから具体的計画が出はじめる。

① 奥秩父主縦走
② 塩見嶽
③ 赤石嶽（二軒小屋―荒川嶽―赤石）
④ 赤石嶽（北又沢戦直―大沢嶽―赤石）
⑤ 仙丈嶽（市野瀬より西尾根）

西期田中リーダーの助言により結局⑤の計画に決定。

(二) 春山までの予定

㊀ 偵察

○才一回 野原 加藤、吉田 高橋（塁、十月十九日〜十二日

○才二回 加藤、小杉山 高橋（輝）十一月一日〜三日

○才三回 冬休み中 北沢峠側から様子をみる

㊁ 春山

○三月十五日頃から七日間

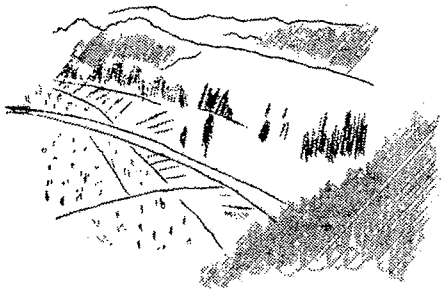
○メンバー
CL野原、SL加藤、現役十五～六名
OB二～三名
○予　定
第一日　夜行新宿発
松峰と柏木の間で幕営、幕営地附近からすこしづつ雪のあること予想
第二日
地蔵岳にBCをつくる
第三日　AC建設
第四日　頂上攻撃
第五日
第六日　下山帰京
スペア一日
なお冬に春山に備えて雪中訓練を行う。

(三)　春山中止
「春は教師は参加しない。山岳部の活動は無責期だけにせよ」という学校の強い申し渡し。僕達は、懇談会を開いたり、何度も先生に頼み、「では春は八ヶ岳の小屋どまりにするから」とも云ったけれど、学校の●理解と顧問の人手不足はどうしようもなかった。二、三の先生が努力して下さったにもかかわらず、「来年から山岳部は無期休部（実質上の廃部）にしてしまえ」という声まで出る始末。結局学校側のペースでおしまくられ、「春山は禁止するし」という一言で個人山行による春山の望みすら絶たれてしまった。

(四)　積雪山行記録
メンバー　CL野原（二正）　SL加藤（二正）
吉田（二正）　高橋通（二準）
期日　十月九日～十二日（記念祭）
コースタイム　記録ノート紛失
記録
十月九日
七時三五分　辰野発飯田線、伊那北駅からバス、九時半頃中尾下車。この先バス不通。歩かなければならない。途中土地の人は、中尾から仙丈へのコースに合流する道があるときき、それを行った。ところが予定外のコースをとった為か、道にまよってしまい、さっぱり進まない。同じ道を三度も往復したり、何度も引返したり・何辺も地図を見たけれどどうも正しい道がわからない。ただ、少しも先にすすんでいないことはさっきからすぐ下に町がみえることでわかる。しまいに四人とも腹をたててお互に、怒りだしてしまった。余り天気がよくて野原が「おい、この辺で、昼寝しようしなどと云いだして加藤におこられた。そのうち妙な原っぱに出て、もうダメになってしまったのでここで幕営。すごく山が浅いことはわかっているんだがどの辺かはっきりわからないままに寝てしまった。「面白ないから帰っても今日のことは黙っていよう」といいかわしながら。
十月十日
柏木の部落へおりてスタートやりなおし。梨と栗の実の落ちている暖かい道、二年生四人だけの山行は気楽で楽しい。　三月ならそろそろ雪があるかと思われるあたりに適当な幕営地があった。ここで昼食をすませ　トラバース地点に赤布をつけて広見岩をすぎ、しばらくゆくと林の中に入り、かなり倒木がひどい。松峰の頂上あたりで日が暮れ幕営。水がないから晩飯は乾飯と水筒四人で二つですませる。どこか遠くで狐みたいな妙な鳴声がする。暗い気味の悪い林の中だ。
十月十一日
水がないから、今朝も、カンパンですませる。ものたりないこと限なし。テント場から十五分ばかり下って「松峰」という指導標の前に出た。ちょっとはずれたところに無人小屋が

あって装備さえきちんとしていれば、冬期も使用可能。すこし離れて水場もある。十二日に帰る為には今日仙丈まで行かねばならないので、野原と加藤がサブで仙丈往復して吉田と高橋が地蔵までテントをあけて飯をつくって二人の帰りを待つことにする。野原と加藤は後を二人に任せて先きを急ぐ。松峰から地蔵嶽までずっとのぼりがつづき途中一ケ所、地蔵の手前に水場があるだけ。松峰からすぐのぼりが始まるが一段落するまでのこののぼり荷物があると苦しい。雪をかぶるとルートがわからなくなりそうだが尾根をはずれないようまっすぐのぼればよい。一段落してやや行くと倒木が非常にひどくなる。道を見失なうことはないが、最近人の通った痕跡はない雪のある時この地蔵附近のボッカは相当の負担になることを覚悟しなければならない。地蔵の頂上をまいて巨大な倒木の間を泳ぐようにしてすすむと仙丈と地蔵の間のオーのピークに達する。この辺から倒木もなくなり、右側にすばらしい景色が開けた。何ともおどろくほど鮮やかなスケールの大きな紅葉だ。上から何千メートルも下まで様々な赤と黄が続いている。顔をあげると仙丈がうんざりするほど遠くにみえる。オ一・オ二・オ三ピークとも適当なテント場がみつかった(ACはこれ以上先につくることは出来ない)。ただ風が少し強いのが難点だが、オ三ピークを下ってあん部に達する。「これより胸突き八丁」と書いてある。なるほどひどい急坂だ。氷ったらすべりそうだが木が沢山あるからつかまれば何とかなる。うんうんうなりながら急坂を登りはじめたが、何しろ昨日の晩から今日の昼まで三食ともカンパンしか食べていないからどうも力が入らない。あえぎながら一時間ばかり急登すると急に前方に木がなくなって岩肌が露出する。このあたり下をみると千尋の谷底まで目のさめるほどの紅葉に思わず息をのんだ。真うしろに地蔵がやさしい姿を見せていて蛮声を張りあげたら吉田達まできこえたらしく地蔵から返事があった。これほど見事な調和をなしたやさしい自然に接して、思わずうれしくなって笑いだしてしまいながら足を速めた。摩高のように浮いた岩ではなく、全部埋まってはいるが雪のある時には僕達にとって一番の難所となるだろう。四〇分ほど岩肌を歩きやせたりよう線を経て頂上に出た。上は風がひどくて十月半ばというのにとても寒い。北岳には雲がかかって黒くかすんでみえ仙丈カールには、頂丈そのものの仙丈小屋が見える。(水場有り)

帰りは地蔵まで一走り。疲れて加藤も野原もおこったように、殆んど口をきかない。夕やみの中を倒木をまたいで地蔵のオーピークのテントに着いたのが五時半、特製のシチューに迎えられて、夜は話がはずんだ。



山行総覧

一九四九――一九五五

コースタイム

十月九日

伊那北着　7.35　発　7.40
黒河内着　8.40
中尾部落　10.40
炭焼き小屋跡　3.05

十月十日

出　発　8.25
広見岩　1.38
松峰手前ピーク　5.17

十月十一日

出　発　8.50　松峰　9.03
地蔵岳水場　10.30
ロバの頭　12.30
胸つき八丁　12.45　発　1.25
仙丈嶽　2.56　発　3.35
仙丈小屋　3.45　才一ピーク　5.22

十月十二日

出　発　8.37　松峰手前ピーク9.35
水　場　11.17
柏木部落　12.17
停留所　12.43　出　発　1.55
伊那出発　4.06
立川着　10.30

「昭和二十四年度」

二十回　小棚山（五月二日～三日）
二十一回　丹沢表尾根（十月二日）

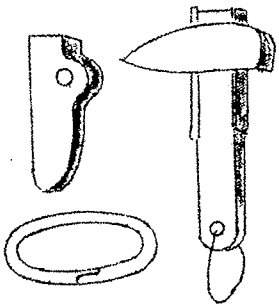
「昭和二十五年度」

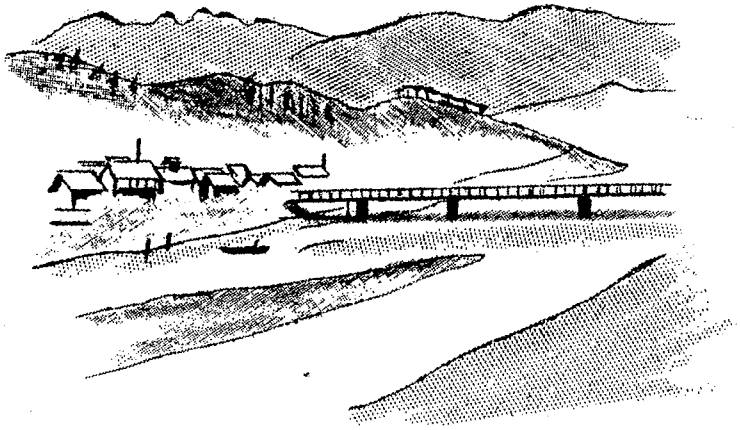
乗鞍山（七月十六日）
奥秩父主脈（七月十六日～十九日）
富士山（八月四日～六日）
笛吹川釜沢遡行（八月二十四日～二十九日）
北アルプス燕槍縦走（七月二六日～二九日）
尾瀬沼
雲取山（一月十一日～十二日）
丹沢主脈（三月三日～四日）

「昭和二十六年度」

四十七回　長沢背陵縦走（五・三～五）
四十八回　鋸・馬頭刈尾根（五・十）
四十九回　勘七の沢（六～十五）
五十回　鶏冠尾根偵察（七・十七～廿）
五十一回　北アルプス酒沢合宿（八・四～十二）
五十二回　大嶽山夜間集中登山（九・十九～廿）
五十三回　南アルプス合宿（十・廿三～廿）
五十四回　雲取山（十・廿八～廿九）
五十五回　丹沢葛葉川本沢（十・廿八～廿九）
五十六回　三ツ峠岩登練習（十一・十六）
五十七回　白馬スキー合宿（十二・廿～一・五）

五十八回　川苔山（二・八）
五十九回　川苔赤抗尾根（三・十七～十八）
六十回　南ア仙丈岳（三・廿四～廿九）
「昭和二十八年度」
六十一回　川苔山新人歓迎会（五・十）
六十二回　丹沢水干沢源次郎沢（六・六～七）
六十三回　北ア烏帽子槍酒沢（七・三～八・八）
六十四回　つづら岩岩登練習（九・十三）
六十五回　奥秩父主脈（十・廿四～廿八）
六十六回　着上カロー川苔本谷（十一・廿一～廿三）
六十七回　武甲山（一・二～一・五）
六十八回　雞冠山尾根―金峰山（三・廿七～四・四）
「昭和二十九年度」
六十九回　川苔山新人歓迎会（四・廿五）
七十回　丹沢水無沢（六・十二～十三）
七十一回　北ア笠ヶ岳、槍、酒沢合宿
（七・廿一～八・十一）
七十二回　大菩薩峠（十・二～三）
七十三回　木曽駒ヶ岳（十・廿五～廿八）
七十四回　万座温泉スキー合宿（一月）
七十五回　川苔山（二月）
七十六回　中央ア西駒ヶ岳（三月）
「昭和三十年度」
七十七回　越沢新人歓迎会（五・七）
七十八回　丹沢勘七沢（六・十二～十三）
七十九回　北ア針の木より酒沢（七・廿～八・七）
八十回　川苔山集中登山（九・廿四）
八十一回　丹沢主脈（十一
八十二回　細野スキー合宿（十二
八十三回　富士山（二
八十四回　空木岳（三





山行総覧

一九五年度

八十七回　川苔新入生歓迎会（四月廿二日）

八十八回　雲取山合宿（五月五日〜六日）

新宿発（6.30）塩山（9.30）出発（10.0）雲峰寺（10.45）柳沢（0.50）巻合（1.45）高橋（2.10）犬切峠（2.40）一の瀬（3.15）牛王院平下（4.15）将監峠（5.45）食事（7.0）就寝（10.0）

起床（5.10）出発（6.0）飛竜山（7.45）狼平（9.15）雲取山頂（10.45）出発（0.30）七ツ石（1.50）鴨沢（3.25）

八十九回　丹沢勘七の沢遡行（六月十七日）

新宿発（6.35）渋沢（7.50）二股小屋（9.25）F.3（10.25）F.4（10.45）F.5（11.10）昼飯（11.20〜55）ゴルジュ（12.05）花立（1.30）名ナシ沢ガレ（1.50）花立（3.00）小草平（3.15）大倉山の家（4.15）渋谷（6.00）出発（6.12）新宿（7.28）

九十一回　奥多摩小川谷遡行（九月廿一〜廿二日）

立川（13.46）氷川（15.42）テント場（16.50）

〔悪谷隊〕テント場（6.10）悪谷出合（7.50）悪谷小屋（10.30）七跳山（11.40）

〔犬麦谷隊〕犬麦谷出合（7.30）二股（8.50）七跳山（11.55）

〔滝上谷隊〕タイム不明

八ヶ岳縦走（十一月三〜四日）

新宿（前日23.55）茅野（5.55−6.59）渋湯（8.37−9.15）中山峠（11.12〜11.33）天狗岳（13.10）オーレン小屋（6.30）オーレン小屋（6.30）夏沢峠（6.45）硫黄岳（7.30）横岳（9.50）〜（10.50）赤岳（11.40〜13.05）行者小屋（14.30）

坂戸山（二月廿三日〜廿四日）

タイム不明

九十七回　乾徳山（五月十九日）

タイム不明

九十九回　鳳凰三山（九月廿二〜廿三日）

甲府発（4.21）芦安（5.10−5.30）夜叉神峠小屋（8.50）−9.00）南御屋幕営（13.30）

南御屋（6.30）薬師岳（7.20）観音岳（8.00）さいの河原（8.55）鳳凰小屋（9.25〜9.40）燕頭山（10.40〜11.30）御座石温泉（13.10）平川峠（15.00）六山橋（15.50）夜山駅（16.50）

九十九回　北八ヶ岳（九月廿二〜廿三日）

芳野発（7.00）渋の湯（8.30〜9.15）黒百合ヒュッテ（11.35〜12.30）中山（13.05）九山（14.40）麦草峠（15.10）麦草峠（5.55）大石峠（6.10）茶臼山（6.50）縞枯山（7.20）八丁平（8.10）親湯（9.50〜10.30）芳野（11.20）

一〇〇回　焼ヶ岳集中沢登（十月十五日）

〔P〕水無本谷　新宿発（7.37）渋沢（7.45〜8.00）　戸沢出合

（9.50）（10.20）下1（10.40）沖原次郎出合（11.35）（12.00）大滝（12.30）塔ケ岳（13.20）（14.20）大丸（14.35）小丸（14.45）鍋割山（15.00）ウシロ沢東越（15.35）二俣（16.35）渋沢（18.10）〔P7〕源次郎沢〔P8〕勘七沢

一〇一回　細野スキー合宿（十二月廿六～廿日）

二十六日　名木山館発（10.10）咲花黒菱分岐（10.35－11.00）黒菱（13.00－15.30）名木山館（17.20）

二十七日　発（8.30）黒菱（10.40－15.00）着（16.40）

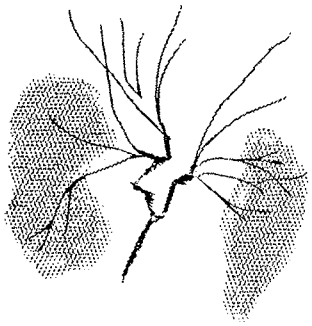
二十八日　発（8.00）黒菱（10.00－16.00）着（17.00）

二十九日　発（8.10）黒菱（9.50－15.20）「オーケルン」（12.00－14.00）

三十日　発（8.30）咲花（9.00－11.30）着（12.00）

一〇二回　川苔山赤抗尾根（二月廿二－廿三日）

古里（13.30）陵線上（16.20）赤抗山手前幕営（17.50）発（7.30）踊平獅子口小屋分岐（9.15）川苔山（9.35）分岐（10.30）踊平（10.45）ソバ粒山肩（13.00）一杯水（14.20）日原（16.00）



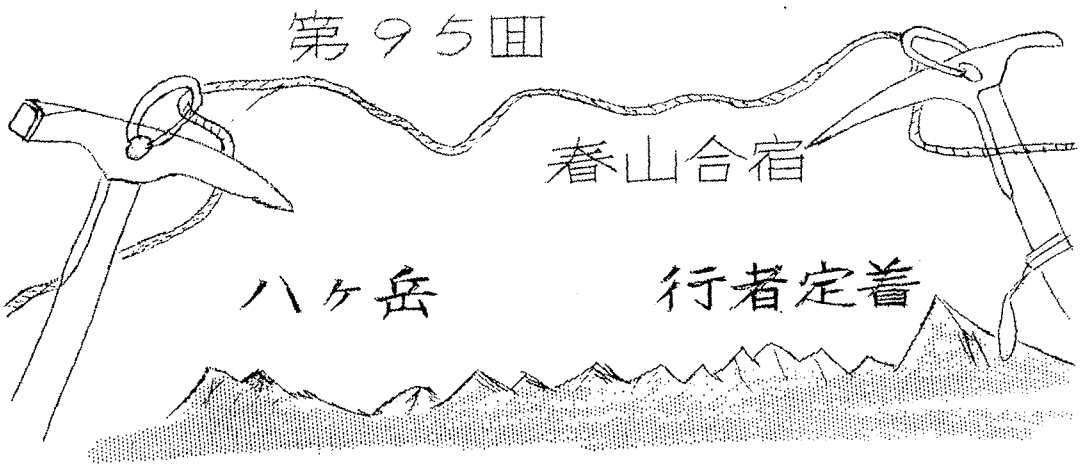
GOSSIP

×涸沢合宿中、台風に遭い、NO.6のテントの連中大いに害をこうむった。M君雨の為のテント浸水に気づかず、朝起きて非常に不愉快な思いをした。なぜってありし日の御幼少の時を再現したんだもの

×スキー合宿のこと、七味の湯を百杯かぶると秀才になると聞いたF君、ご苦労にさっそく湯をかぶった。二月の実力テストに効果が顕れることを期待したが、しかしこの湯の効果はてきめんに顕れないから、序々に実力を上げ、九月の実力にはきっとよい成績をおさめることだろう。

×本校のスキー教室の連中と上野で会ったが、皆新品のバリバリしたものを着ている。それに反して我山岳部の身の回りは、実用オーのオール中古品、これを見たM君、負けおしみかコスタイルなんか問題じゃないよ。スキーはうまく滑ればいいんだよとさて御本人、その言葉どおりうまく滑れるようになったかしら。

×夏山合宿のこと。オー日目の徳本登りの途中、河原で一匹のスイカを十五分して食べた。このスイカS先生よほどうまかったらしく、夢にまで見たそうだ。下界にもどって、スイカを食べすぎませんでしたか。



期日　三月二十一日〜三月二十五日

参加者　黒沢（CL 20〜22日）　田中（CL後期）
沢野、関谷、今井、蟹沢、杉浦、駒井
木原、OB長崎、町田、飯塚、福田、平沢

行動記録、

三月二十一日　新宿発（23.55）ー茅野着（5.55）ー茅野発（6.40）ー馬鈴薯農場（7.30〜7.45）ー美濃戸（10.05）〜10.25）ー行者小屋（14.00）ー昼食（15.30）ー夜食（19.30）ー就寝（22.10）

新宿発23.55の夜行で出発。床の上と席の上とに別れて良く寝る。一番バスを待たずして臨時が出る。遠く八ヶ岳、南ア、北アの峰々が眺められて本日は快晴の様子。バスは馬鈴薯原々種場なる所に着く。出発後、途中松田林両氏の帰途に会う。挨拶してすぐ出発。何とか橋を渡った所で朝食にする。ラジユースで湯をわかして飲む。雪は農場からの路上に5〜10センチ積っていた。美濃戸まで一ピッチ。美濃戸登山口の所に南沢は積雪の為通行不能と書いてあるが、見た所なんとか行けそうだし、又林、松田両氏の話もあるので、南沢を行く事にする。一ピッチを三十分として進む。新雪がないのであまりラッセルはいらない。雪はかたまっていて少ししか沈まない。そして段々と一ピッチの時間を長くして行く。途中少し道を間違えてから全員少しずつペースが落ちてきて、腹のすきを覚える。そして行者のテント場に着いた時は全員体力を出し切っていた。その後、明日の計画として中・赤のコルにCLを出すことを決定した。

三月二十二日

起床（6.30）ー出発（9.30）ー阿弥陀のコル（10.20ー14.12）ー行者小屋（14.25）

夜半から吹雪になり、朝になってもやまないので、今日は停滞と決定。しかし、そのうちに少し風がおさまったので　阿弥陀の方へ出かけることにする。雪は相変わらず降っていて、視界は全然良くない。コルでは、グリセード、ジッヘル、滑落停止などの雪上練習をする。雪がやわらかくて、二十センチ位もぐるのでうまく滑らない。昼食後、黒沢帰京昼頃から雪はやみはじめる。練習を終えて、行者に帰ると、OBの平沢氏がいらっしゃっていた。夕食後、明日の計画として中・赤のコルにテントを出し、現役をニパーティーに分け、一つはそこに泊ることにする。

三月二十三日

起床（5.40）―出発（9.15）―中・赤のコール（9.50）―PII発（10.15）―PII赤岳着（10.50）―PIIコル着（11.20）―PI発（12.20）―PI赤岳着（12.55）―PIコル着（13.20）―PII出発（13.30）―行者小屋着（13.50）

CIを出すために中・赤のコルに向けて全員出発。風もなく全くの快晴である。交代でラッセルをしながら登る。コルでは、雪庇や風向きを考慮してテントを設営する。PI（田中今井・壁沢・沢野）をそこに残し、PII（関谷駒井・杉浦・木原）は赤岳に向けて出発。途中アイゼンワークを覚えながら進む。頂上で休憩し、写真をとってからコルにおりる。その後、PIは赤岳に登り、PIIはPIの為に水を作る。PIが降りて来ると、PIIは行者に出発した天候が段々と崩れて来ていた。

三月二十四日

PII出発（8.45）―CI着（8.55）―PI出発（12.10）PII出発（12.15）―PII阿弥陀岳（13.50）―PII CI着（15.20）

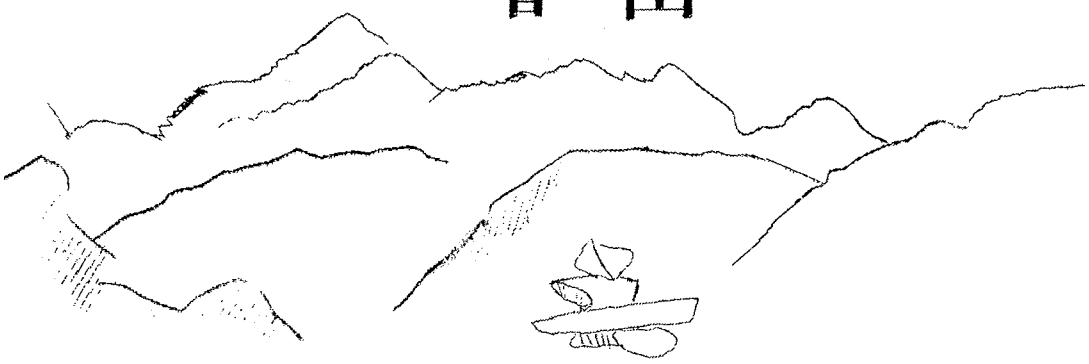
夜半相当吹雪く。CIにいたPIは風向きが正反対になったため、一苦労だった。PIIは予定通りに出発して、コルまで来たがかなり吹雪いていた。一応全員テントに入って休む。十二時頃風もおさまったので、PIは行者へ出発PIIは阿弥陀へ向かう。雪庇がかなり出ていて注意を要するし、ラッセルも腰までの所も少なくない。阿弥陀登頂後　CIに向かう頃雪も止み、遠くの山々が見え始める。しかし、それも中岳あたりまで来ると、俄然吹雪き出し目もあけられない程になった。CIに着いてから、ブロックを積みなおして吹雪に備えた。

三月二十五日

PII出発（8.00）―行者着（8.25）―行者発（9.45）―美濃戸（11.02）―農場（12.55）―茅野着（15.50）

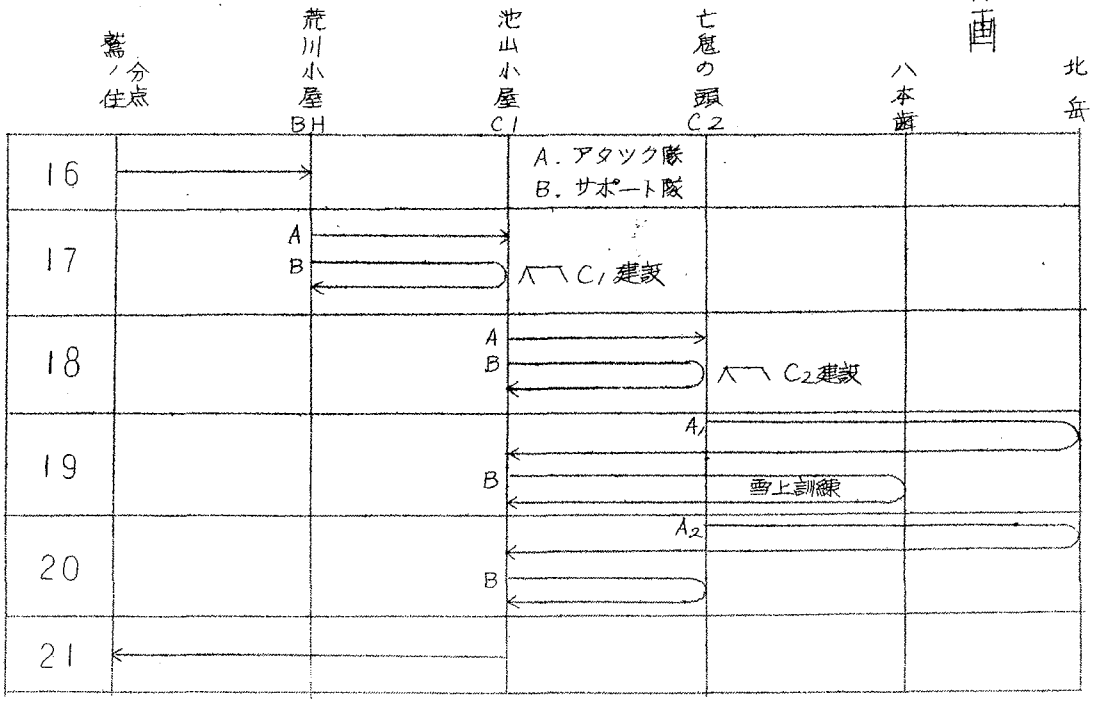
PIIは、テント撤収後行者に下る。そこで全員に荷物を配分してから出発する。途中、新雪があったので時々腰までもぐった。ファイトを出して美濃戸まで一ピッチで行く。美濃戸からは雪は消え、泥道になっていた。午後九時過ぎに浅川に着き、本山行も無事に終りを告げた。

1957年度 春山 北岳



一九五七年度 春山合宿計画

今年度の春山合宿が云々されたのは、代も代った、九月最初の正部員会であった。候補地も種々上ったが現在の部の状態を考え討議した結果、記念祭の準備が始まる九月終り近くに極地法による北岳池釣尾根と決定した。直ちに無雪期偵察を三日間にわたり田中・沢野中村晃が行った。その後、北岳のみ登頂するか両の岳迄行くかが問題となったが結局北岳・両の岳の登頂を目標とすることになった。計画概要は春休みを十日間利用し荒川小屋をBHに、池山・亡恵頭にそれぞれC1、C2を出しC2より北岳・両の岳へ二度アタックする。



又、コーチとしてO.Bに二、三名随行してもらうということである。

行動記録

期日　三月十六日〜二十一日

参加者　CL田中、SL関谷、今井、中村晃、橋本（正）、高山、秦、梶内、川田（準）

小田、飯塚、林（O.B）

三月十五日

新宿発（二三・五五）

CLの田中が風邪のため遅れて来ることになり、代りに橋本鋼が参加する。春山を成功させんと、常より一層ファイトに燃えて商京する。

三月十六日

甲府（3.30〜7.30）ー芦安（8.30）ー新道分岐（9.30ー9.50）ー野呂川本流吊橋（13.20）ー荒川小屋（14.00）

まだ眠い内に甲府駅を降ろされる。空気はすっかり冷えきっていて、肌寒く感じる。バスの待合室へ腰掛を運んでその上に横になる。しかし寒くて眠ることも出来ない。朝日を浴びた南アの峰々が窓ガラスの向うに、聳えている。震えながら朝食をとり、バスを待つ。芦安でバスを捨て、青木興業の車で鷲の住分岐点に到る。軽く体操をした後、十貫の荷を背負って歩き出したが、荷は遠慮なく肩に食い込み、下が所々凍っていて滑る。その上頭上に振り廻らされた針金に旗竿が引掛って大層歩きずらい。出発してまもなくバラ〜になってしまう。勾配はさほどでないが、息がきれ、汗が目にしみる。一五五六米の鷲の住山頂を越えて下りにさしかかると、雪は一層凍りつき、傾斜も急になってくる。滑って木にはさまってやっと止まる者も出る。口をきく者とてなく、よたよたと雪の上を歩いて行く。春山に於て最も苦しかった日であろう。荒川小屋が小さく眼下に見える。が、一向近付いてこない。雪は下るにつれて深くなり北に面しているからであろうが、吊橋の付近が最も深く膝を没する。野呂川にかかった吊橋を渡り、左岸に移って石のごろ〜した河原を歩く。意外に時間をかけて、やっと荒川小屋に着いた時、時計はすでに二時を指していた。重いザックを投げ出して、遅い昼食をとる。一休みして早速夕食の用意にとりかかる。夕食を早く済ませ明日の好天を願ってシュラフに潜り込む。今日は正部員も全員不調で自分の体を始末するのがやっとで、他の事はほぼO.Bに任せっきりという有様であった。正部員の名にふさわしくないことだ。

十七日

BH（8.20）ー昼食（10.20ー11.00）ー荒川小屋（12.10）ーC1発（13.20）ーBH（14.40）

今日はC1への荷上げである。ドロノ溶けた雑煮を食べ、六貫強の荷に気をよくして元気に出発する。小屋の前からすぐ急坂を登りにかゝる。昨日にひき締き空は一点の雲すらなく澄み渡っているが、樹林帯を行くので景色はあまり見えない。道は凍っている所もあるが、さほど悪くはない。時折樹間から向、農鳥が顔を出し、自然ファイトが湧いてくる。しかし傾斜が急で思うように進まぬ。急坂の途中から雪が表れる。空腹でバテてはまずいというわけで、十時過に昼食をする。ビスケットは食べる気もせず、水ばかり飲みたくなる。みかんが実にうまい。急坂も終り傾斜が緩やかになると、雪が深くなる。時折雪に足をとられて、膝の上までもぐり、片足を抜こうとすると又もぐり、体力を消耗する。しかし雪はしまっている。重量級のS君は特にもぐる回数が多いようであった。そうこう

している内に今日の予定地、池山小屋に着く。早速雪を踏みかためて、テントを二張張る。記念撮影の後、飯塚さん等四人のボッカ隊は明日の荷上げのため、急いで今来た道を荒川へと下った。一方CIでは三名が偵察に行ったが、森林限界迄の往復は無理なので、装線へ出て引返す。ラジウスは快調になり、全く静かな山の夕暮であった。しかし夕刻より雲の動きが怪しくなってきた。明日の天候が危ぶまれる。明日のCII建設のため、栄養を摂って、第一次登頂隊を決定して寝る。

三月十八日

アタック隊

CII（7.35）－八本歯（8.15－10.40）－昼飯（11.35－12.00）－北岳（12.35～12.40）－CI（16.55）

早朝から雨。今日の予定は、CII建設なのでのんびりと小雨になるのを待つて七時出発。二月の川苔山でわかんが使えなかったが春山も使えそうない。雪は適当にしまっている。道はよく踏まれている。旗竿が木の間に引掛って歩きにくい。雨はやんで曇っているが、時々十月山行のあった鳳凰三山が姿を表わす。山へ入って三日目、調子が出てきたのであろうか、全員快調なピッチで進む。急坂を喘登して装線に出る。装線でアイゼン着用。始めて使うものもいるので、全員アイゼンを着けて出発する迄に一時間弱。アイゼンのキュッ〳〵という音が快く響く。森林限界に近付くにつれて、風が強くなる。森林限界手前で昼食を摂る。穴を掘って全員入り震えながらカンパンをむさぼり暖いジュースを飲む。もう一息と元気に出発する。南側からの風が強く頬が痛む。砂払いの手前に三〇米ザイルをフィックスする。そこは雪が腰あたり迄あり、右手は広い斜面となっている。

それより先旗竿に赤布を取りつけて、要所々々に立てる。亡霊の頭への最後の登りでは雪が凍って青味を帯びている。亡霊沢の頭に着くと直にテントを張る。一通りテントを張り終えたので剣谷等三名はCIへ下る。彼等を見送って急にひっそりとした。強風の中でブロックを積む。一度強風に崩されてしまい。広河原側を二重ブロックにする。テントの中へ入るが、風でロウソクの火を消してしまう。タバコの煙がゆれ乍らのぼっていく。風は激しさを増し、明日の天候が気遣われる。夕なぎであろうか五分程風がおさまる。北岳バットレスの冷え〳〵とした偉容が見える。再び強く吹き出し外へ出ることも出来ない。広河原側のテントを背中で押さえながら夕食。夜の幕がおりると一層強くなる。いつでも靴がはけるように準備をし、頭でテントを押さえてシュラフに入ったが、まんじりとも出来ない。

○BH（7.00）－CI（10.40）

○CI（7.00）－昼飯（9.50～10.20）－CII（11.40～12.35）－CI（14.10）

三月十九日

朝になっても風は弱まらない。登頂をあきらめて三時半起床。しかし一時間もすると風も幾分おさまった様なのでベンチレーターからのぞくと鳳凰等の山々が芝明るくなっている。まさに日が昇らんとしているのだ。テントの中は急に勝気に満ち、早速登頂の準備をする。停滞を覚悟していた我々には何とも言いようのない喜びである。出発する頃には殆ど風もなくなっていた。出発の時からアイゼンをはく。CIから登ってくる者に書置して出発。八本歯に至る迄は雪底はあったがわけなく進む。八本歯の二峰よりアンザイレンして小田さん、今井、中村のオーダーで登る。

我々二人はアンザイレンをして登るのは始めて故、必要以上に緊張してはかどらぬ。三峰此捲き道も雪がついていてよくないので仕方なくアップザイレンを行う。ザイレンを残して先へ急ぐ。才四峯と五峰の間で彼から声がするので振返ると、CIからやってきた林さん等七名である。八本歯の手前からこちらと二三応答して先へ進む。雪に一本のひびが入っている。全く不気味である。緊張感がみなぎりザイルを握る手に力が入る。北側は所々ラッセルを要す。この頃(六時半)からすでに間の岳登頂を断念する。やっと難関の八本歯を通過した。時刻はすでに十一時を過ぎている。目の前の間の岳北岳から雪煙があがっている。ザイルを解いて昼食にする。ガレは雪がついているのでかえって歩き易い。間・北の分岐点に着くと西からの風が意外に強い。ピッケルを握りしめて西側を雪庇をさけて痩線の少し下を登る。頂上真下ではアイゼンのアアケも殆どもぐらない。ついに頂上へ着く。十二時三十五分。ついに新入生歓迎会に始まり夏山、スキーと訓練をしてきた我々は一年間の目標である春山を制覇なし得たのだ。ここに立つとやはり富士はアルプスの山々を異りスケールが何倍も大きい。熱いジュースを一杯ずつ飲み互に登頂を喜び、記念撮影をする。ボッカをしてくれた関谷等のことがふっと頭をかすめる。風が強く雲が出てきたので急いで今来た道を引返す。登頂の喜びでたるみがちな心をいましめて八本歯にさしかかる。再びアンザイレンをする。慎重ではあるが登り　スピーディーに通過。

CIIが見え始めてからかなりの時間がかかる。明日再び間・北岳へ挑む林さん、田中、関谷及び飯塚さんに迎えられてCIIへ入る。ゴーグルを使わなかったので少々目をやられている。彼等の作ってくれた料理で腹ごしらえをしてCIへ下る。森林限界を過ぎると温度も上り、風もなく汗が出てくる。CIIに比べてCIは全く穏やかで、風一つない。

行動記録

三月十九日　サポート隊

CI(6.00)—CII(8.10—9.50)—八本歯(10.20〜10.55)—CII(11.40〜12.00)—CI(13.05)

六時全員CIに向け出発。森林帯にあるCIでは風もなく少し曇っているだけなので、アタック隊はすでに出発したものと思った。昨日の風雪でトレースは全く消えてしまったがその下が固まっているのでルートをとるのに困難ではない。最初の稜線に出たところでアイゼンをつける。木の間より快晴の空を背景に間の岳、豊島岳が真白に雪をかぶって見える。森林限界まではルートファインディング練習のためラッセルを交代しながら一年生トップに歩かせる。CIIにつくと今まで全く見えなかった北岳が突然その全姿を現わした。しかしアタック隊は置手紙によると、早朝風雪のため七時に出発したとの事。我々は林さんよりアイゼンワークを教わった後、アタック隊を迎えるため八本歯に向け出発する。八本歯の上より見ると、コルの少し上の所にまだ北岳へ行く途中らしいアタック隊がのろのろと進んで行くのが見えた。今日は間の岳を断念せざるを得ない。健斗を祈ってCIIへもどる。才二次アタック隊を残して全員CIへ。夕食の出来る頃アタック隊が帰って来た。北岳とはいえさすがにうれしそうである。北岳登頂を祝って夕食をごちそうして別れる。今夜は風も弱く空も快晴なので明日は必ず間の岳に登頂出来ることを喜びシュラフにもぐり込んだ。

二十日第二次アタック隊

CII発（5.00）―八本歯（5.25）―北岳肩（7.00）―北岳（7.20）―肩（8.30）～（8.45）―八本歯（9.30）―CII（10.00）

二・三〇分起床、外へ出ると星空にくっきりと北岳の勇姿が浮んでいる。出発の用意をしているとツエルトのないのに気がつく。間の岳へ行くと手紙を書いてまもなくガスがたち始め谷からの風も強くなり天候がくずれそうである。朝早いため雪面が固まっていて歩きやすい。八本歯は林さんをトップにアンザイレンなしで下る。昨日のトレースがしまっているため大して時間がかからなかった。八本歯のコルから例年雪があるということだが、ほとんどラッセルはなかった。肩までは積雪なく、表面が氷結していて、アイゼンには快適である。肩につく頃より風雪一段と増し、視界は全くきかない。夏道通り山頂へ向う。下りはまともに風に抵抗して下るため息も出来ぬほどだ。それにルートを間違えて小尾根を下りてしまい時間も体力も相当ロスしてしまった。肩の岩陰で食事。ここで間の岳へ向うかCIIに引きかえすか協議した結果、間の岳は涙をのんでCIに帰ることにした。日数にさえ制限がなければと残念でならない。八本歯は下る時よりもはるかに楽に通過。CIで少し前ついたばかりのCI隊に迎えられる。一腹の後O.B合宿のため、八本歯の手前までテントを前進するのを手伝い、いろ〳〵お世話になった林、飯塚両氏に別れを告げCIへ帰る。

三月二十一日

CI発（8.50）―荒川小屋（11.10～12.00）―トラック道分岐（13.55）―夜叉神峠入口（15.05）―芦安（15.50～16.50）―甲府（17.56～18.46）

今まではりつめていた気持がゆるんだのか動作が鈍く出発が一時間以上も遅れてしまった。荒川小屋辺の下りは、上部のところは氷結しているため、非常に危険で予想よりも時間がかゝった。又鷲の住山も雪が固まって悪く、又時間を超過、このため芦安まで急がねばならなかった。

甲府行きのバスの中で、各自この春山で感じたことを話し合いながら思い出多い南アルプスを後にした。

食糧反省

年間の食糧係長であった沢野君が都合により参加出来ぬことになって、一月中旬にやっと食糧係が決定した。それ以後彷徨、他技部報、山岳雑誌等を参考にし、又O.Bにも種々伺って、何度か計画を練り直した。そして一部の食糧は二月の川苔山行においてテストした。計画においては栄養、食欲、至済的な面をも考慮したが、主として重量の軽減や調理時間の短縮という事に重点をおいた。重量の点では十人五日分と五人二日分非常食十二回分、十人一回分の食糧で二二・八貫となり、一人一日平均して三八〇匁（一・四五㎏）であった。調理時間は朝が五十分、夜が一～二時間であった。品目別に使用量を計算した後、三月十日からの期末考査の事を考えて、三月一日に野菜・魚肉類等を除く大半の食糧を買付け、十四日に残り食糧を買った。これら食糧は食料品店等から集めた段ボールの箱にキャンプ別に色分けをして、一日分毎（夕・朝昼）にパックした。しかし山へ入ってから予定が変更されてもさしっかえないものは二日分を一箱とした調味料や嗜好品、お茶等は、

テント別にパックした。箱の大きさの都合上米や味噌も一緒に入れたが、濡らしたりせず丁ねいに扱えば箱が破損することはないであろうが、やはり別にした方がよいようである。箱内には使用量を明記した献立表を入れ、更に参加者全員に献立表を配布して、食糧について理解してもらった。これは大いに成功して、食糧係がいなくとも何をどれだけ食べるのかわからないというような事は起らなかった。尚食費は一人一日一六〇円であった。

朝食は雑煮だけでは飽きるので三日位米も使用したかったのであるが、調理時間から考えて最後の一日だけ米とした。餅は一人一合七勺とし味噌と醤油を使った。共に肉又は鯨大和煮を入れたが、醤油の方が好評であった。餅は沸騰した鍋に入れて七～十分で軟くなる。メザシかヒダラをつけたがあまりうまくなかった。

昼食にはビスケット（四〇匁）カンパン（三五匁）かたパン（四枚）を用いた。ビスケットは全くボソ〳〵してうまくなかった。堅パンは実にうまく水もジャム類もなくして食べられる。一枚五円で少々高いが今後の春山においては、これを使用すべきである。今回は一人四枚にしたが、我々の如く食欲旺盛な者には六枚は必要である。昼食にはテルモスにジュースを入れて使用したが、安物買いの何とかで効率が悪く、その上帰る迄には二本とも割ってしまった。しかし春山においてはやはり使用することが望ましい。

夕食はライスカレー、豚汁、スープを使い主食は全て米である。この内スープが最も好評であった。カレーライス、豚汁には肉又は鯨大和煮を用い、スープにはベーコンを使った。乾燥ジャガイモは十年前？の物だそうだが殆ど味がなかった。今回は肉は二日しか使わなかったが、今後冷凍肉の研究をしてみたらよいと思われる。

この他に飲料として緑茶、紅茶、ジュース、スキムミルクを使ったが、朝と昼は同じものにした方が朝の手間が省ける。

春山においては幸にして、停滞の日はなかったが、停滞の日の食糧についても又米についても、もっと研究する必要があると思われる。野菜は玉ねぎ人参の他は全て乾燥野菜を用いたが、重量の点からも乾燥した物がよかろう。

雑煮A（味噌・人参・切干大根・乾燥ジャガイモ、乾燥キャベツ、乾燥インゲン・肉又は鯨大和煮・メザシ又はヒダラ）

雑煮B（Aの味噌の代りに醤油を使う）

味噌汁（切干大根・わかめ・油揚）

ライスカレー（人参・玉ねぎ・乾燥ジャガイモ・マーガリン・肉又は鯨大和煮）

豚汁（中味はライスカレーに同じ）

スープ（ベーコン・人参・玉ねぎ・乾燥ジャガイモ・マーガリン）

献立表

	朝食	昼食	夕食
3月16日			カレーライス
17日	雑煮（A）	ビスケット ジャム・ドロップ	豚汁
18日	雑煮（B）	乾パン ジャム・ドロップ	スープ
19日	雑煮（A）	かたパン ジャム・ドロップ	カレーライス
20日	雑煮（B）	かたパン ジャム・ドロップ	豚汁
21日	雑煮（A）	乾パン ジャム・ドロップ	

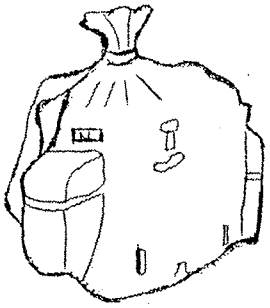
反省

西高山岳部の一年間の最高目標である春山を全員の協力で間の岳こそ悪天候のため失敗はしたが、北岳登頂に成功し一応目的を果すことが出来た。しかし、今山行での注意すべき点を再び繰返すことのない様挙げると、

1、計画が最終段階に入ってから一部変更になった。これは予め予想されることは、考えておかねばならない。

2、隊員の決定は少なくとも準部員以上は、一月の初めに決定し各係も同時に決定すべきである。

3、春山に行かぬ者は、最初から全く非協力的であったが、たとえ参加しなくても、部員である以上、部の目標に協力的でなければいけない。



ひとり一言

〝歩く〟

小津 亮介

木立の中を、急な坂道を、急な下りを、枯れ落ちた木の葉の上を、雪の上を、岩の上を熱い太陽に照らされ、汗を流し、重い荷を背負って、ひたすらに足元を見つめながら、休み無く歩く。頼りになるものは自分の足のみ。歩き始めの快い歩み、だんだん疲れて、小またに、機械的な歩み、ばてて、いまにも足がつり出しそうな歩み、かけ下り、いまにも笑い出しそうな歩み。歩くというのは非常につらいが、やっと頂に着いた時、又やっとバスの停留所に着いた時、はい松の上に寝そべって足をおもいきり伸ばして投げ出す時、ベンチに座って靴を脱ぎ、ふくれ上った足のまめをつくづくながめる時、そこには何とも云えない感激がある。苦難を通して、目的を達した喜びの感激と、目的をとげて、今、山を去ろうというしみじみとした感概とがある。今はまだ山岳部に入ってたった一年なので、下をむいて、歯を食い縛って、機械的に歩く事しか出来ないが、今に、「オーケー！ ザツク下ろせよ！」という声をひたすらに待ち望んで、周囲の景色の良さなど、見もやらず、足元のつまらぬ草や、石ころや、泥や、時々自分の額から落ちて来る汗のしずくを見つめて歩くような事なしに、周囲の絶景を見回し植物を観察し、山の話を聞きながら歩ける様な、足と、精神力とを持てる様になりたい。そのために、ひたすらに、ただ歩く。

考える登山

板垣 公未 生

僕が山岳部に入った主なる理由は「山に登りたい」という何の理屈もない単純な欲求であった。しかしこれから下級生を指導する立場におかれる僕には、近頃登山というものの認識が欠けて、このままで指導できるかどうか心配だ。

そこでバリバリ登るというだけでは得られない考える登山が必要なわけだ。登山というものの本質を、早く見つけることが必要だ。（これは大変むづかしく、なかなか得にくいと思うが、現在においてはほんの一部でも把握すればよいと思う。）その本質を土台にして自己を山に立たせるのが、真の山登りであ

ると思う。僕達の年代においては、冒険心や快感をだけ求めて山登りしやすいが、それは土台がしっかりしていない為に、とかくそうなりがちである。自分のたどる先の方を考えていないのだ。山登りの本質を見つけようとして悩むことは、これからの山行を意義あるものにするのではないか。登山を自分に適したものにするのではないか。

「雄大な山の中を歩くちっぽけな人間。だが彼は自分に適した登山道を心得ている。彼はその雄大な山に順応できるのだ」これが、僕の完成したい登山だ。考えることを土台にして。

丹沢へ行った時のこと

弓削　喬資

私の山でいだく感情は奇妙です。

昨年の十月丹沢へ行った時です。私は山行前のトレーニングに出ていなかったことや、気分的に沈入っていたため、大倉尾根を登山中皆から遅れてしまったので二年生のKさんがついてくださいました。うすく霧がかかりふもとの町のネオンがボーッと見えていました。夜行登山のうえ私は眼がわるいためなおのことうすくかすんでいました。前へ上へ行っても行っても友達はずっと先に居るのか、懐中電灯の光も見えず、ほんとうにKさんと私だけの世界のようでした。くたびれて来るにしたがってとりとめのないことを考え、というよりも、ただ莫然と頭に浮かび、ふっと気がつくと、急に淋しさが一ぱいになり、前へ進むことが不思議に思われたりします。もうろうとしている時には、傍ではぎますKさんの声も単調なリズム音のように感じ、全く何を考えても、考えるはしから忘れて行きます。その間あるいて居るあいだじゅう次々と色々な思いがうつて行きます。

ように暗やみが恐しくなったり、いっか読んだ本の子供の、Mさんの顔が絶えず、眼の前をちらついたり、急に涙が出そうなほど悲しく――何が悲しいのか知りません――なったりします。又、そんな時とっぴようしもない聖句が心に浮かびアゼンとするのです。このような感情はどう言って良いのかあらわせません。――そのくせ、ふもとへ着いて電車に乗る頃は何もなかったかのように友達と話をします――そしてとうとう頂上へついた時のあの恐しいNさんの声も何かなつかしくなり、うれしさでホッとためいきをつく間もなく、命令にしたがうのでした。

ラジエースで沸かした紅茶の暖かさが忘れられない思い出です。

僕と山

松浦　晋

「何故あんな重い荷を背負ってまで山に登るの？」と、よく聞かれる。「バカと煙は高い所へ登る」とは、まったくよく言ったものだ。いったい何が因果か知らないが、気がついたときは重いザックを背負って島々谷をノソノソ歩いていたわけだ。山の何処が僕を引きつけるのか……。山の姿は絶えず変化している。ある時は、眼前にどっしりと立ちはだかり、又ある時は我々の訪問に恥ずかしげに姿を隠す。又人間の行いに少しでも気にさわる事があれば、すぐに狂った様に暴れ出す。

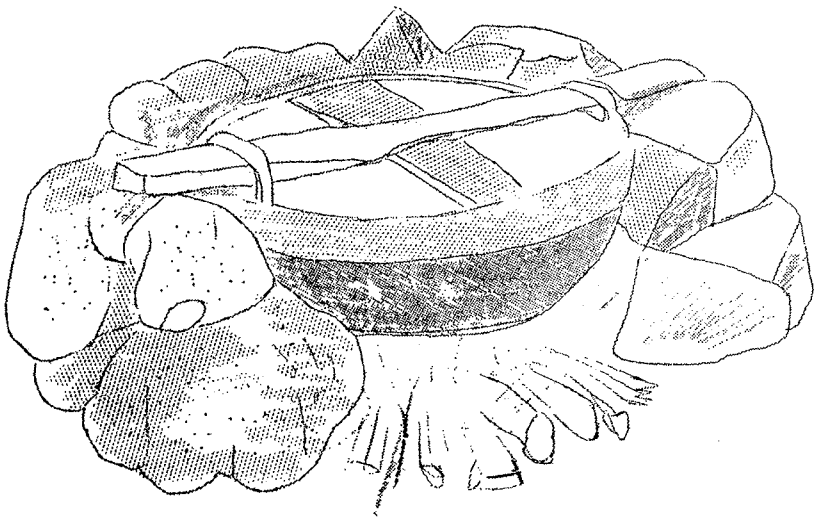
僕に緊張感を与えるのは朝の山だ。冷い空気に心を引き締めざるを得ない。太陽が山肌を赤く染め始めると今日一日が始まるのだ。

僕にファイトを与えるのは真昼の山だ。ギラ〳〵と輝く太陽の下に、青というよりむしろ紺碧に近い空の下に、岩壁は誇らしげに輝やかせながら競い合っている。そのがッチリと組合った岩肌に根を下す可憐な花々は、心に潤いをもたらす。僕に一日の反省を与えるのは夕方の山だ。真赤なそして大きい太陽が山の肩に沈む頃、明日も又頑張ろうと心に誓う。僕に郷愁を与えるのは夜の山だ。真黒なヴエールに無数の宝石をちりばめ、静かに見下しながら、山の苦しさを忘れる迄やさしい光を投げ掛けてくれる。微動すらしないこの黒い世界の中で、この弱い光が、どんなに心強く感じたことか。僕は信じている。山は誠意ある人のみに登ることが許されていると。

考える登山

一年F組　福田善明

一寸した動機……山の歌を唱いたい。よい友達を得たい。という、いかにもロマンチツクな乙女の様な夢から山岳部に入部したのが去年の九月。あれから五月。この間に、乙女の夢は破れた。入って山の苦しさ（他の人達は、あんなのは苦しさではないというが、）を自分なりに感じた。それは、みじめであった。泣きたかった。寂しかった。トレーニングでは吐気がして、トレーニングのあった日



はがっくりしたし、十月の山行の時も哀れであった。一体何の為に来たのかと、その時、真剣に考えた。あのロマンチックな夢は、そこにはすでになかった。その頃頂近くで寒い風が吹き、はるか眼下に、麓の灯が見えた時、一片の幸福を掴んだ様な気がした。だがこれだけの事を得る為に来たにしては、少し苦し過ぎると思った。けれど帰って来になると想い出が残っている。それでは想い出の為であったのか、とも思った。スキーは、楽しかったが連日鼻血がでて、楽ではなかった。二日七つ石へ行った時は、二度と山へ行くまいと決心した。人にもいった。他の人に一時間以上も遅れ二年生と父兄に付添われて下山した時は全く恥も外聞もなかった。ただ氷川へつく迄にと願った。山の上で氷川の灯が見えた時幸福とは思わなかった。山は束の間に人の考えを変える。人を喜びに満たしもする。悲しませもする。もう行くまいと決心してからまだ一月もたっていないが、自分はまた秋父行を計画している。どうしてだかわからぬ。山にとりつかれた人の話しをよく聞くが、山にそんな魅力のあるのは本当みたいだ。こんども又、山から帰ってきたら、きっと何か

感じるだろう。山にはまだ二回しかいっていないが行く度に何か感じるのは、決して悪いとは思わないから、これからも考える登山をしたい。しかしそれには、体力をつくる事が才一だと人は言う。

〝この一年〟

小山　武

またたく間に過ぎてしまったこの一年間を省りみて、山岳部に入ってどんな様子であったか考えてみることにします。

先ず五月は、新緑の大菩薩峠へ行きましたが天候にめぐまれ、遠くに南アルプスの山々を望み真近に富士の霊峰を仰ぎ見て、非常に楽しいものでした。そして、すっかり山にあこがれてしまいました。その頃は、登山の苦しみ、喜びなど全く知らず、ただ、山に対するあこがれが、僕を山へ引きつけていました。

六月は沢登り。始めてで様子が解らなかったが、結果として、沢登りは面白いが、危険も多いという事が解りました。しかし、水の清らかな事、岩模様の美しさ等、東京にも、こんな所があるのかと思わせる程のすばらしさでした。

さて、一学期の期末考査がすむと、いよいよ夏山の準備が急ピッチで進み、まちにまった夏山合宿が始りました。

今年は、北アの徳本峠―大滝山―蝶ケ岳―横尾―槍ヶ嶽―穂高嶽―上高地のコース。最初は、重いザックが肩にくい込むようで、辛く思いでしたが、北アルプスの山々を眼前に捕えた時は、うれしさでいっぱいで、何ともいえない気持でした。物すごい峻線、ごつごつした岩肌は「全くすごいし」の一語に尽きるようです。最初あれをどうやって登るのか不思議な気さえしましたが同時にあの頂に早く達したいという気が起り、心を奮い立たせました。日本の山を代表する、この北アルプスには、強い印象を与えられました。雲一つない空に浮かぶ峻線、青々と茂ったハイマツの中をぬって行く登山路、三六〇度に展開する大パノラマ、どれもこれも、すばらしいものばかりでこれらを眺める時は、それまでの苦労を忘れる時でもあり、かいがあったとしみじみ思う時でもありました。しかしこの合宿で困った事は、足に靴づれができてしまったことで、合宿半ば頃痛み出し、それ以後毎日痛む足に閉口したのは　失敗でした。また、行く前は、何日でも山にいたいと思っていたのが、いざ、十日間位山に入っていると、あと何日で帰れると、指折り数えて待つような気持になったのは、どうしたものかと迷ってしまう。とにかく、合宿が終って数々の貴重な体験を得られ、少し自信もついたので、満足しました。

二学期に入って、九月の二回目の測行で、しだいにコツも解ってきたようになり、面白味も加わりました。

十月は、丹沢塔ヶ岳でしたが、夜歩いたので、途中で引返したので、特に印象は残りませんでした。

十月以後山行がなく毎日、トレーニングだけで、面白くない日が続きましたが、冬休みにスキー合宿、二月に丹沢山へ行くことができました。

以上一年間の山行で、僕にどれだけの進歩があったか、解りませんが、とにかく、今までの事を少しでも生かして行きたいと思っています。

夏山の感想

三 和　二

山岳部に入ってこの一年何回か山に登ったがやはり最も印象に残るのは夏山である。長い山行であるだけに装備も従来とは大分異なりピッケル等も加わったが最も着るしい点は荷物だった。でっかいザックにギュンくつめこんだ時にはこいつは無事帰還出来るかなと思った程だった。案の定徳本峠の登り、大滝山への道では、のどは乾くしやはり参加せねばよかった、とつくづく思った。しかし苦しい事ばかりで終始したわけでは勿論ない。大滝山の頂上にやっとたどりついてドロップをなめながら這松の間に寝ころんで時、食事時、見事な星の夜空を見上げた時、雪上訓練の時などの青すぎる程の空などの感激は絶対に忘れる事の出来ないもので、下界ではそう得られるものではない。タクシーをひろったので、カゴに乗っかったのでもなく、正真正銘の自分の二本足で一歩一歩苦労してこそ始めて得られるものなのだ。今日の夏山は変化に　、雨の床上浸水を御効少の頃のオネシヨの再発かと思って、飛びおきさせられたの台風の夜もあった。

かくて松本で水を食べ大過もなく終ったが今考えてみるとすべてのつらさ苦しさも楽しい思い出となって残っている。よって山へ行く大きな意味の一つには自然に接しそして苦労して感激を求め、思い出を作り、世間のみみっちい考えに負けない大きな心を養うにある、といえるのではないだろうか。

試みに部員の顔を見てごらん、みんなすばらしい人達ではないか。

山岳部懇談会

時。一九六〇年一月廿日七・〇〇PM

出席者　小林・岸田先生・父兄（十人）、現役（十六人）　O.B（三人）

一、自己紹介

二、遭難報告（十月十八日、福田、関谷氏の滝谷遭難）。両君立派な登山家であった。新聞・其の他にも若干誤った発表もあった。両君及び西部登高会としては、滝谷の知識は十分であった。今回は偵察隊の才一回目であった。

当時の両君の行動

十八日テント出発（福田・関谷両氏だけで黒沢氏等は残った。天候については天気図等書いて、良く分っていたがその日は雪吹になった。アイゼン、ピッケルを持たなかった為、登行前進出来ず、十八日昼頃退却　時間的に見て、その時は既にかなりの所まで登った様だ。ナダレに出合い、Cフェースまで再び戻ったが、前進不能（雪吹のため）再び流される。岩小屋で東大生三人と出合う。十八日夜福田氏　十九日朝七時関谷氏死去（凍死）

原因、⊙ナダレによる疲労　⊙服装備の不十分（急ぐため）　⊙アイゼン、ピッケルを持たない（岩登りに邪魔であった）　⊙退却の時機の不適当　⊙退却の際、ルートを間違えた為の時間のロス　⊙退却の際、命綱をはずしていた　⊙ビバーク中、予備食料を持たなかった　⊙ビバーク中、精神的融和が少なか

つた。

父兄・岩小屋、東大生の食料等について質問。

O.B 「精神的融和については、年長者である両氏の方に責任があると考える。岩小屋滞在中の両名の位置等については、それに困難の原因があるとは考えない。

⊙学校は安全の保障がない限り、山行を認めない。⊙学校は顧問の能力以上の山行を許可しない。⊙万一の場合の全済的援助は今の所、不可能である。⊙O.Bの指導は希望するが、あくまで学校の要請に基づくべきである。⊙個人として山岳部の装備、貸出しは、原則として禁止、ただし顧問会で要請し、校長がこれを認めた場合は良い。⊙個人又はグループの山行は禁止しないが西高生として学校で指導する。指導に従わぬものは、適当な処置をする。

西朋登高会の近況

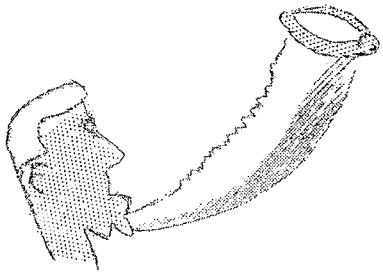
この半年、我々の活動は殆んど停止した。わずかに、正月のスキー合宿と二月のスキー大会の二つを数えるだけである。〃山に登らない山岳会〃――残念ながらそう云われても仕方のない状態であった。昨年、二人の貴重な中堅会員を失ったことも、我々の活動をにぶらせた原因になっている。それ以上に、当会の構成メンバーの社会人対学生の割合が、この一・二年の間に全く逆になってしまったことが大きな原因である。社会人の急増、特に中堅会員の殆んどが、就職したため、山行は大きく制限されてしまった。

O.B会の性格として　全会員が、常に山行に参加出来るという同一環境にあることはできない。ある者は就職する。ある者は仕事のため東京を離れる。またある者は家庭をもつ。このように社会人として成長すると共に活動を制限されるのは当然である。しかし、毎年新会員が送り込まれてきて、ある程度の新陳代謝が行われてきていれば、会そのものの活動は、これほど沈滞しなかったはずである。

山に行けない山岳会――それは練習場のない運動部のように、実に淋しい。この半年、我々はこの春大学に進学する準会員を期待してきたのである。幸い、準会員六名の大学入学が決定した。彼等を中堅会員に成長させること――そのためには、二年三年という長い年間がかかるであろうが、これを我々の基本方針として活動を続けていく。

今後の西高山岳部

三年生引退の弁



登山人口は、非常な勢いで増加しつつあり、それに伴なって、その大衆化が急速に進行している。その大衆化とともに、様々な登山の方法や、考え方がでてきているらしい。横道は、こうした一種の混乱の中で、自分自身の頭で考え、採るべき登山の方法を、自分自身の頭で考え、自分が今どんな登山をしているのかを、明確に自覚しなければならない。そして正統な登

山を追求する登山家の卵としての誇りを持つと同時に、その急速な普及に伴なう浮いた傾向と山に登ろうとする者のうちにあるエリート意識をきびしく戒しめ、世間の誤解と反感をも、といてゆかなければならない。

登山の大衆化という一般的な傾向に反して西高では、山岳部は、その規模を出来るだけ縮少し、活動を制限しようとしている。新学年のはじめには、顧問を引き受けて下さる先生がみあたらず、実質的ク部の声さえあって全く風前の灯だった。こうしたやり方は、結果的には、登山行為そのものの否定ともつながりかねず、部員であるなしにかかわらず登山しようとする者の多数ある現在、兼な結果を生みださないだろうことを学校も考えてくれると有難いのだが。

部活動正常化、発展の為の根本的な方策は部活動に教師の指導と直接参加を要求する教育庁通達とかいうものを実情に即したものに改めてもらうことかと思う。高校の先生に、山登りの指導を要求することが一般に無理だというだけでなく、参加すること自体が、大きな負担となっている現在では、その参加を活発としてはまともな部活動の出来るはずがない。それと西高では、他の運動部に比べ、顧問の先生個人の責任が比較にならぬほど大きく、又積極的指導をしないで「これこれしてはいけない」だけで済ませようとする学校の事なかれ主義も大きく災いしている。生徒の要求をおさえて部をなくしてしまったとしても西高生多数の山へ行きたい気持を根絶することはできない。だから、学校に山登りの健全なスポーツとしての重要性を認識してもらうと同時に　コーチ（指導員）制度を制度として確立することが必要である。顧問の他に指導能力のある父兄者に一定の权限と責任をあたえて指導させ、これを東京都が公認する。一校一人以上の指導員が無理なら数校兼任でもやむをえない。あるいはOBの中から有資格者を審査して指導員を委嘱してもよい。こうすれば、顧問に過大な責任や負担をかけなくてすむし、それどころか、指導を学校全体に広げれば伸風登山の横行する今日の野放し状態に対する有効な対策ともなろうし、優秀な岳人養成の一助ともなろう。あるいは他の方法をとったとしても、ともかく、今日のように、縦にも横にも連絡のない高校山岳部の現状では何らかの統一的な組織が必要と思われる。こうした高校生の安全な登山と、組織化の為に、日本山岳会などが積極的にのりだしてくれてもいいと思うのだが。

当面の方法としては学校が西高山岳部に対して抱いている全般的な危惧の念を解消し、部員のまじめさと熱意を理解してもらうことが才一だと思う。「一・二年休部状態が続けば、その断層の為に従来の西高山岳部的やり方は自然に消滅するだろうから休部がよい」といった非建設的な考え方を学校がするとしたら、非常に残念だ。

現在のところは、四月から十一月までの毎月一回の山行を公式山行として学校に承認してもらい、十二月と三月をスキー合宿としてその範囲内で活動せざるを得ないだろう。冬から新学年にかけて公式山行のない期間には個人山行の形でおぎなうより仕方がないが、山の気象、それぞれの山の特徴、食糧、装備登山史などの研究にあてて　講習会を開いたりするのも一案だと思う。ただ四月から十一月までの山行も「顧問の参加」という点からかなり活動が制限されることが予想され、個人山行が、相対的に重要性を増してくるから

全体の部活動から見て、個人山行をどう評価するかが新しい問題となってくると思う。とりこの春山の成功しという部の目的が実質的にかわれている現在、一年間の部活動の目標などこに置くかということも部員の間で充分検討されなければならない。ただでさえ、他の運動部よりとっつきにくい山岳部では、自的への強い自覚が必要であり、それと並んで部員各自に強い責任意識と仲間意識が要求される。この三つなしで単に山への関心だけでは部の存在の意義がうすれ、内部から部が崩壊してしまわないとも限らない。

他の高校山岳部の優秀な記録や派手な活動を見聞するたびに、僕達はあせりや羨望を感じてきたけれど今考えると、まちがっていたと思う。丁寧山は横尾合宿だしと胸を張って答えてかまわないのだ。いたずらに難しいところも選ばなくても、そこが山である限り、もっと深い山の理解と秀れた山行への努力の余地はあると思う。今後は限られた範囲にある西高山岳部としては何年先かの飛躍的発展を期しながらも、そうした方向への地味な努力をもっと心がけるべきだと思う。そして現在の転換期をあくまでも西高山岳部の伝統的精神を生かしきるとともに、過去十五年の歴史からくる圧力をはねのけて、新しいもっと活気あふれた部とする為のチャンスとして生かしてほしい。

（チーフリーダー　三年　野原　充）

一九六〇・八・十八

幕営用具		
テント	No.2	食テン
	No.6	付シート(2)
	No.7	付シート(1)
	No.8	付内張
	No.9	ツエルト
	No.10	付内張
	No.11	付内張
ペグ		6袋
テント掃除用ブラシ		6ケ
シャベル		1本
マント		11枚

炊事用具		
フライ		1枚
ノコギリ		3本
ナタ		4本
ヒフキ		1
ナベ	大	2
〃	中	2
〃	小	1
アライナベ		14

コッフェル	4
カップ	5
キュウス	1
ホウチョウ	5
シャモジ	5
オタマ	5
タワン	7

燃料関係	
石油コンロ	1
ラジウス	1
スペア	大 1
	小 1
プリモス	1
台皿	11
石油かン	2ガロン 1
	1ガロン 1
ポリタンク	3ℓ入 1

登攀用具	
ザイル	7本
スデナワ	5タバ
アイゼン	8本爪 2組
〃	4本爪 2組

都立西高山岳部部則

正　則

第一章　名　称

第一条　当部は都立西高山岳部と称し、事務所を都立西高内に置く。

第二章　目　的

第二条　スポーツアルピニズムの一般的基礎技術修得を目的とする。

第三章　部　員

第三条　当部は部員、顧問教官より成り、各個は部の活動発展に対し協力的でなければならない。又かんとく助成教対として西期登高会員を置く。

(1) 部員は各個の精神、体力、技術に応じた義務を有する。即ち部員を新入部員、準部員、正部員の三段階とする。

(2) 顧問教官は学校側によって任免される。

(3) 西期登高会は西高山岳部卒業生より成る。

第四章　役　員

第四条　部の運営を円滑ならしむるため、左の役員を置く。

(1) C.L　一名。　(2) S.L　二名

(3) 各係長　五名　(4) 各係員若干名

(5) かんとく　一名　(6) コーチ若干名

第五条　(1) C.Lは正部会員会において正部員間の互選により選出される。

(2) かんとく及びコーチは、正部員会の要望により、顧問教官を通じ登高会が登高会員中より定める。

第六条　(1) C.Lは部の最高責任者として部の運営を司り最終決定権を有する。

(2) SLはCLを補佐しCL不在の場合はこれを代行する。

(3) 各係長は各係の責任者として各係を代表する。

(イ) 総務係・他の山岳団体との交渉、記録文献の集成係報告を成し統計資料を総会毎に公表する。部報の発行、その他一切の事務を執行。

(ロ) 器具係・器具の保管、研究等を行う。

(ハ) 会計係・会計を司どる。

(ニ) 食料係・食糧の研究改善をはかる。

(ホ) トレーニング係、トレーニングの企画実施を行う。

(4) かんとく及びコーチは正部員会の疑問に応じ、又会合に出席して意見を述べ、正部員会をかんとくせねばならない。

第七条　役員のうち、係員をのぞき全ての任期を八月下旬より一ケ年とする。

施行細則　第一部

第一章　部員の資格及び任務

第一条　正部員

(1) 正部員は細則第二部により進級を認められた者にして、正部員バッチを貸与する。

(2) 正部員は部の第一線部員として行動し、且つ後輩の部員を指導し、部の向上をはからねばならない。

第二条　準部員

(1) 準部員は細則第二部により進級を認められた者

(2) 準部員は部活動に対し精神的、体力的、技術的、知識経験を獲得する努力を成し正部員進級を目指して積極的に協力せねばならない。

第二章　会合

第三条　定期総会

部員は必ず出席せねばならない。欠席者は正当の理由ある場合CLにその旨書面で提出せねばならない。

第四条　臨時総会

召集の知らせは当日の第三時限の休み時間迄になす。他は定期総会に同じ。

第五条　正部員会

準部員以上により構成し、部の運営、山行に関する一切の審議を成す。議決権は正部員のみとし、CLが議事を運行

第五章　会合

第六条　会合は出席者の如何にかかわらず成立するを得る。

(1) 定期総会　月一回　CLが召集する。

(2) 臨時総会　随時　CLが召集する。

(3) 定期正部員会　週一回　CLが召集する。

(4) 臨時正部員会　随時　CLが召集する。

(5) 各係会　随時、各係長召集する。

(6) 部員審議会　随時、CL召集する。

(7) 山行準備会　公式山行毎に必要回数山行リーダーが召集する。

(8) 山行報告会　公式山行毎に山行一週間以内に山行リーダーが召集する。

第七条　正部員会は部の最高審議機関である。部員に正部員資格者なき場合又はこれに準ずる場合は顧問教官及び監督コーチがこれを代行する。

第十条　総会は部の運営に関し審議権を有するが議決権を有しない。

第六章　部則の改正

第十一条　部則の改正は総会でCLに申し立て、正部員会を通じてCLが最終的に決定する。

する。正部員にして欠席する者は、その正当なる理由をCLに提出せねばならない。決議事項は全てCLを通じて総会にて報告せねばならない。

第六条　各係会

各係の任務を遂行するため必要に応じ各係の責任に於て行う。欠席者は係長に届出ること。

第七条　部員連絡審議会

審議は正部員及び監督、コーチより成りオブザーバーとして顧問教官を召致する。欠席者は委任状をCL宛提出すること。

第八条　準備会

該山行に必要なる知識、装備、食糧、技術等の準備を行う。山行に参加如何にかかわらず全員出席すること。

第九条　報告会

山行後一週間以内に行い、山行の検討、反省を行い、次山行の基とせねばならない。

第三章　山行

第十条　公式山行は、部運営の一環として正部員会に於いて決定されCLの認証を受けたる山行にして、そのリーダーはCLが正部員中より指名する。正部員参加不可能なる時は監督に一任する。

第十一条　準部員以下に於いて冬山不参加者は才二学期当初にCLに届出ねばならない。

第十二条　CLは冬山不参加希望者に対して十一月より三月までの一切の山行を禁ずることが出来る。

第十三条　何人山行は山行前に必ずCLの認可を必要とし、CLはその山行が危険であると感じた時にはその山行を中止させねばならない。

第四章　罰則

第十四条　東京都立西高等学校生徒会規約細則第一章第十一条に基ずき左の如き罰則を設ける。

(1) 正当な理由なくして総会に連続三回以上欠席した者は正部員会の責任と权限において処分する。

(2) 正当な理由なくして準備会に欠席した者は、山行への参加を禁ずる。

(3) 細則第十三条に反したる者はCLの責任に於いて処分する。

(4) トレーニングの参加状態悪き者は正部員会で審議の上CLが処分する。

(5) 正部員にしてその義務を怠れる者はCLの責任に於て除名する。

施行細則　第二部

当規約は、部員が部の運営を円滑ならしむる為、各個の能力に応じた責任を分与する審議規約とする。又同時に部員の具体的指導要綱とする。

第一条　部員審査会構成

正部員、かんとく、コーチより構成され、部事運行はCLがとるものとする。又出来得ればオブザーバーの出席を仰ぎ意見を述べてもらう。

第二条　議決は出席者の過半数を得ることを要し、CLの決定によりかんとくの承認を必要とする。

第三条　審査会は毎年四月上旬、六月上中旬、八月中旬、十月下旬、二月上旬の五回　CLの召集に於いて行われ、正部員欠員（第一回目を含む）の場合は顧問教官立会いの下にかんとくの責任に於いて行なわれる。

第四条　新入部員条件

(1)　本校生徒にして、一年及び二年生にして当部の目的に賛同し入部を希望する者。但し、二年生は第二学期以降は認めない。

(2)　入部希望に対し所定の手続を完了し、正部員の認可を以って入部を認めバッチを貸与する。

第五条　準部員進級に関する要件

(1)　入部六ヶ月以上　山行日数十日以上、部公式山行三回以上の参加ある者及び審査員の推せんある者のうち、左記諸項廿点中十二点以上修得せる者を準部員と認める。

(2)
(一)　集団としてのメンバーシップの修得　五
(二)　部会出席状態及び部規律の体得　五
(三)　四貫以上の負荷山行の参加　四
(四)　一般的読図力、山生活に於ける基本知識　三
(五)　夏期幕営能力（最低二回の経験を有する）　三
(三)　次年度前発に当り(一)項条件なき者は自動的に審査され得る。
(四)　三ヶ月以上部会費滞納ある者は一ヶ月進級を遅滞せしむ。
(五)　準部員は山行に当り、記録、会計、器具、個人装備、食糧燃料、医療等各係の内四係を順次任行するものとする。

第六条　正部員進級に関する要件

(一)　正部員は部運営に関する責任分担者であり、部の第一線部員なるを要す。

(二)　入部後一ヶ年以上、山行日数廿日以上、部公式山行七回以上、全山行中個人山行は三割を出ない者及び審査員の推せんある者の内、左記諸事項一〇〇点中七〇点修得せる者とする。但し(イ)～(ホ)の内いずれかが五点以下の者は正部員の資格を失うものとする。

(三)
(イ)　科学性
(1)　スポーツアルピニズムの基本的理解と部活動に対する一般的理解　一〇
(2)　責任性
(ロ)　各係任期中に分ける検討・反省による前進意欲と自己の任務遂行能力　一〇
(3)　協力性
(ハ)　他部員との協力性、理解性、指導性　一〇
(二)　部会、トレーニング出席状態　一〇
(4)　一般基礎知識と経験
(ホ)　苦難に対する忍耐性反発性並びに斗志　一〇
(ヘ)　登山中に於ける一般的マナーの修得　一〇

(ト) 羅針能力と位置判断能力　五
(チ) 危険に対する　一般的知識　五
(リ) 登山中に於けるメンバーシップオーダー等の理解と実行　五
(ヌ) 七貫以上の負荷山行に於ける一般的知識と経験　五
(ル) 無雪期に於ける幕営生活の知識と経験　五
(オ) 積雪期　〃　五
(ワ) 自然状況に対する注意力　三
(カ) 人為　〃　三
(ヨ) 二回以上の沢登りを基盤とする知識　三
(タ) 雪上に於ける一般的知識と経験　二
(レ) 主として露岩地帯に於ける編隊行動の知識　二
(ソ) 登山の基礎としてのスキーの初歩的経験　二

(四) 右項満足したる者にして次の行為ある者は正部員認可及び正部員バッヂ貸与を一ヶ月遅滞するものとする。
(イ) 三ヶ月以上部会費未納あるとき。
(ロ) 公式山行時直前に理由なくして、個人山行をなしたるとき。

山岳部員名簿

顧問教官

小林隆一	世田谷区池尻都営アパート一一四号
中沢ナミ子	調布市小島町四三〇

正部員

CL 13 野原光	杉並区新町三五四（三九八）〇六七八
SL 13 加藤清氏	千葉県船橋市宮本町二の七三六
13 小杉山基昭	杉並区阿佐ヶ谷四の九三七
13 吉田浩二	杉並区西田町一の四六一（三九八）三八一三

準部員

13 高橋輝夫	中野区城山町一二七（三六一）六三二二
13 三和洋二	杉並区宿町二四八平井方（三九一）三一〇〇番
14 板垣乙未生	同　井荻二の六〇（三九）六三九四
14 山本省治	同　高円寺七の九二一
14 小津亮介	同　和田本町九六六
14 石井喬資	同　下高井戸二の四三〇（三二一）三五五七
14 松田治	同　神明町九三（三九一）一二九六

新入部員

14 福田善明	杉並区永福町二六
14 小川勝	同　阿佐谷二の六四二（三九一）六六三九
14 佐藤恵子	八王子市子安町四の四（〇三六）二一〇二八八
14 岩崎洋子	中野区大和町五六五
14 黒田健夫	同　新井町四八〇（三八一）三六二五
15 平木桂太	杉並区荻窪二の九六（三九一）二八九七
15 岩波英子	同　和田本町三六
15 角田義人	同　松庵北町八一（三九一）七五六九
15 菱沼直志	同　荻窪一の一八四
15 三木真杉	同　西田町一の一五八公団住宅一〇一一〇五
15 京谷邦寿	三鷹市下連雀六六（〇三二）三一四九〇三
15 丸村良雄	武蔵野市関町四二〇の一二一
15 三科正彦	中野区大和町三六五

西朋登高会

特別会員

都築修一	長野県松本市女鳥羽町四六三
中村淳	世田谷区北沢二の二四五
岩井富士雄	台東区浅草桂町三の二　自（三五一）一九〇八
布施千恵子	千葉市稲毛町二の四
篠崎武	西多摩郡日出村大字大久野一七一八
安藤英孫	宇都宮市睦田町一〇七更田とし子方

普通会員

2	林　春彦	杉並区永福町二五五	自(295)二〇三二
2	南波貞敏	北多摩郡国分寺町国分寺字殿谷戸六三〇の〇	勤(381)二二九一 三二二一
4	長崎正弟	広島市台屋町京橋会館アパート四〇七号	
4	田中将利	中野区大和町一八〇	自(381)〇八七五、三五三〇
4	平沢　勇	横浜市港北区高田町一三五六	勤(45)八三六一 三六八
4	田中　実	杉並区馬橋二の一五〇	自(311)六三八九 勤(311)二二〇二
4	笹田英次	中野区仲町三番	自(368)六三三二 勤(271)七七一一
4	鈴木輝夫	世田谷区北沢二の一九二	自(411)一四六三
4	山口雄弘	武蔵野市吉祥寺二〇〇八	自(022)二一五八八七
4	佐藤信治	八王子市本郷町二〇	(026)二一一三六
4	松田朝夫	杉並区関根町七〇	自(378)三六一七
4	町田　明	同　上荻窪二の六四	自(57)〇〇四一 勤(57)〇〇四一
4	里見朝規	同　馬橋四の五四九	勤(56)一九九八
4	渡辺　亨	同　天沼二の三五六	
5	成瀬泰雄	横浜市神奈川区台町分町九二日本鋼管東神奈川寮内	
5	加藤鈴夫	杉並区永福町四七	
5	鈴木　潤	同　下高井戸四の九四七	勤(92)二二七一
6	亀山敏子	武蔵野市吉祥寺二七六九	自(022)二一三五七二
6	米野弘明	杉並区大宮前六の四〇一	勤(54)四七二六
6	小田尚於	北海道札幌郡豊平町平岸字区三八四三井農林三建住	
6	林　武志	武蔵野市吉祥寺四七八	
6	飯塚康史	千葉市稲毛町一の八七三	
6	川口和雄	中野区宮園通五の三一	
7	中山　博	杉並区阿佐ケ谷四の四六	自(311)四五六五
8	坂田幸彦	同　中通町一六〇	自(398)一六九二
8	高橋邦雄	同　馬橋三の三九六	
8	京田守弘	仙台市米子町一　反川方	
9	松田　稔	杉並区神明町九三	自(371)一二九六
10	黒沢　隆	同　馬橋二の一〇八	自(311)七三二〇
11	今井義治	仙台市北三番町一六　東北大YMCA寮	
11	田中康弘	中野区大和町八〇	自(98)〇八七五、三五三〇
11	沢野　徹	千葉市新田町七五	
11	中村乙丙	品川区五反田六の一九一	自(441)一四五五
11	橋本鋼太郎	世田谷区松原町四の一四八	自(321)二三八二
12	小川建吾	杉並区上高井戸三の八五七	自(378)〇〇一三

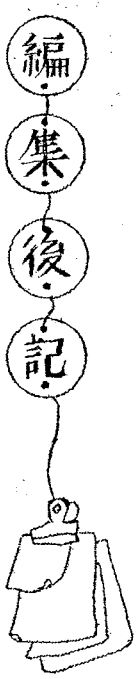
準会員

11	植木美邦	練馬区立野町九一〇	自(996)一〇四七
11	関谷爽雄	武蔵野市吉祥寺七五三	
12	鈴木葉子	川崎市菅二四七二	
12	堀内俊夫	中野区鷺宮五の二二二	
12	川田秀明	杉並区上高井戸五二二一五七	
12	高橋範行	中野区本町通五の一	自(381)八五四七
12	高山利忠	杉並区阿佐谷四の四三三	
12	田辺和彦	同　阿佐谷四の九四二	

12	森　武司
	杉並区久我山三の二〇九

会友

4 甘沢民雄	杉並区荻窪四の五六
6 岩崎元子	同　大宮前二の七一二　☎(37)九七五一
6 伊藤弘美	同　高円寺六の七五四
6 岩波康之	葛飾区小谷野町三〇三
8 佐伯岩夫	岐阜市正木一丁目



この彷徨才十六号が約七年ぶりで発行の運びとなりました。何せ全然経験のない仕事で一年生三人で部員の間を原稿集めに飛びまわり、やっとこのほど発行の運びとなりましたが、この間に三年生を送り出し、新入生をむかえ、ぼくたちも二年生になりました。今一年間をふりかえり、部報の原稿を読み返すと、今は退部してしまった奴や、三年を思い出しなつかしい気持になります。この次発行の際はさらに発展した部誌となることを願い、これを編集後記とします。

（山本・局削・板垣）

発行日　十一月十八日

発行者　杉並区大宮前三ノ一一八　西高山岳部

編集責任者　山本省治